

---

# とある機械の航空参謀（スタースクリーム） TF

スカイワッフル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある機械の航空参謀 スタースクリーム T F

### 【Nコード】

N5553Q

### 【作者名】

スカイワツフル

### 【あらすじ】

これは、トランスフォーマーでありデストロンの航空参謀、G1スタースクリームの物語

俺はあの忌々しい破壊大帝メガトロンへの裏切りを繰り返した結果、殺されてしまった！

だが、俺は諦めないぜ。どうやら俺様は特別で死んでもなお、幽霊として存在できるらしい。

そして奴に復讐しようとした。

だがまた失敗した……。もう嫌になってきたぜ……。

と思ったのはつかの間！神が俺を『違う世界』へ飛ばしてくれるらしい。そして『ある条件』を満たせばガルバトロン、サイバトロン共を圧倒する力をくれるらしい。簡単に行くといいんだがなあ。

作者から

———  
作品内容はスタスク×禁書目録

初心者がえがく物語です。変な所があると思いますが、多めに見てくれると嬉しいです。

## プロローグ（前書き）

私は初心者です。ですので下手です。けど宜しくお願いします！

## プロローグ

これは、元デストロン航空参謀スタースクリームの物語

幽霊状態のスタースクリームは奇妙な空間をさま迷っていた。

「ち、何処だここは。」

『君がスタースクリームか。』

「！。誰だ！隠れてないで出てきやがれい！」

突然の声に彼は驚く。そして反射的に体が反応し『幽霊』の体で戦闘態勢を取った。

『隠れてなどいないさ。君の目の前にいるよ』

「？」

彼が振り返ると、白く巨大な惑星で二つの角、口の様な物と土星を思わせる輪を持つ者がいた。

だが、彼はその姿に見覚えがあった。

「お、お前・・・ユニクロンか？」

ユニクロン

それは、宇宙が誕生した頃から存在し、星を食らい捕食する巨大なトランスフォーマーである。

だが、

『ユニクロン？いや違うな。私はトランスフォーマーの神だ』

「・・・・・・・・・・は？神？」

『そつだ、神だ』

数分間の沈黙が続く。

「・・・・・・・・ま、まあいい。で、その神が何の用だ。」

『君を強化してあげよう』

「なに！それは本当か！」

彼は喜びながら聞いた。子供がずっと欲しかった物がついに手に入る。と思っっているのと差ほど変わりがない用だった

『本当だ。あと質問だが。その体でメガトロンに復讐する気か？』

「・・・・・・・・・・。」

彼は答えなかった。

前までのスタースクリームだったら、真っ先に「ああ、あの老いぼれジジイに代わって俺がニューリーダーになつてやる」と答えるだろう。

だが彼は予想しているのだ。体を手に入れた所でデストロンとサイバトロンの両軍に勝てるのか。と

『そんな君に大サービス！違う世界に行ってもらおう！』

「違う世界だと？」

『ああ、その世界に『ある者』が侵入し我が物にしようと思ってるのにな』

「で、俺にそいつを倒せと？」

『そつだ、そいつ等を殲滅すれば君にメガトロンを倒す力を与えよう』

「よし！乗ったぜ！！」

『ああ、だが、そいつ等も手強い。だから強化してあげよう』

「強化だと？」

『君に新しい機体をやる。それで幽霊じゃなくなる』

『ナルビームを麻痺砲だけじゃなく、直接的な威力を出せるようにし、ビークルモードのスピード大幅アップ。そして耐久力、体力、力、全てパワーアップだ』

「わーお。最高じゃねえか！」

彼は機械の顔をにやにやさせながらテンションが高くなってきた。

『じゃ、はいパワーアップ』

スタースクリームの体が一瞬の内にパワーアップした。

「はっ、やっぱり体がある方がしっくりくるぜ！」

『最後の忠告。あっちの世界では善人になれよ』

「は、なんで」

『じゃないと、お前は死ぬ』

「・・・死ぬ？どうしゆう・・・」

スタースクリームの下に、ブラックホールらしき物が現れる。

「事d、ってうわわああああああっ」

これが、話の幕開けである





## 戦いとジェットロン(前書き)

スタスク「俺はデストロンニューリーダー、スタースクリーム様だ  
！」

サンクラ「主役だからって調子に乗りやがって。」

スカワ「ニューリーダー(笑)」

## 戦いとジェットロケット

学園都市 第十九学区

「うわあああああああああああああ。がはあつ」

莫大な叫びと共に空からスタースクリームは落下した。

幸い、スタースクリームは飛行能力があるため、衝撃は最小限に抑えられたのだが。

「く、何処だ此処は。」

見る限り生命体は全然見当たらない。その代わり寂れた町があった。

「たくよ。何すればいいんだっけかあ」

「たしか、世界の侵入者の殲滅だっけか。まあ、すぐ終わらせて元の世界に帰えるとするか。」

スタースクリームは起き上がると。

「トランスフォーム！」

全トランスフォーマーの持ち技『トランスフォーム』を発動させた。

彼は、戦闘機（F-15イーグル）に変形。そして次の瞬間、戦闘機とは思えない速さで空を舞った。

「なるほど、確かに速度が急激にパワーアップしてやがるな。」

彼はパワーアップした事を自覚しながら地上の街並みに目を向けた。そこはさっきまでの寂れた町でなく。いかにも都市的で人間がたくさんいる街だった。

機械の目で街の中の看板、標識などを見た。

（どうやら。ここは、アメリカではなく 日本と言う街らしいな。）  
数年前に地球に居た時の経験からそんな事を推測していた。

だが彼はいきなり移動を停止した。

「……なんだありゃ」

彼の目に映った物、それは一人のボロボロになっている修道女。

そして巨大な、土と機械、石などでできた『ゴーレム』とその巨大な怪物の拳を、両手で受け止めている少女だった。

地上

風斬氷華は細い腕二つでギリギリゴーレムの片手を抑えていた。友

達を守るため、自分は人間では無い事を打ち明けてまで守る。

と心に決めていたからだ。

（化け物と戦うのは・・・同じ化け物がしなくちゃ・・・。私はもう、あそこには戻れない。あの時間は・・・もう二度と、帰ってこない  
ッ  
」

そしてゴーレムは次の攻撃に移ろうとしていた。

残っている片手で動けない風斬を攻撃しようと言っただ。

「ッ。  
」

風斬はゴーレムの片手を防ぐのに精いっぱいだ。さらに片手を止めるのは不可能に近い。

しかし彼女は心に決めていた。

（だからって・・・見捨てられる筈がない!!）

「ひょうか!!」

インデックスが叫ぶ。だがゴーレム容赦なくは拳を振りおろす。

（だって・・・。友達だからッ）

彼女は覚悟を決め。瞳を閉じる。

だが。それが彼女に直撃する事はなかった。

「おらよおおッ」

ゴシヤツ と何かが潰れる音が響き、ゴーレムは倒れた。ゴーレムは建物に激突し建物の瓦礫の下敷きとなったのだ

「「!!!」」

二人はあまりの光景に言葉を失った。そもそも思考自体、停止していた。

何故なら。

巨大なロボットらしき者がゴーレムにハイキックしたからだ。

魔術でもなく、学園都市の兵器でもなく、地球の産物でもない者だった。

「面白い事になってるじゃねえか。このスタースクリーム様も混ぜるよ」

ゴーレムは上に乗っかっている瓦礫を薙ぎ払い。ゆっくりと起き上

がる。

だがスタースクリームは容赦をしなかった。

両腕のキャノン砲でゴーレムの腹部を打ち抜き、ゴーレムは吹っ飛ばされる。

また周りの建物に激突する。

その繰り返しが行われた。

時間が経つにつれ、周りの建物とゴーレムが破壊されていく。

「ほらほらあー！どっしたあー！」

「ひよ、ひようか。どうしよう。このままじゃ私達も巻き込まれちゃうんだよー！」

「と、とにかく、早く逃げて・・・」

二人はオドオドしている

「くらえー！」

だがスタースクリームが次の手を使おうとした瞬間、一人の少年が走ってきた。

「うおおおおおおおおおッ」

「とうまー！」

少年はゴーレムに右手で触れる。

パキンツ　と鋭い音が響き、ゴーレムは砂の如く崩れていった。

「ふう……」

少年……上条当麻は、安心したように息を吐いた。

風斬とインデックスも安心したようだ

だが、スタースクリームは満足しなかった。

「おい！お前！せっかく俺が腕慣らしをしていたと言っのに！」

「うるせえ！あのままじゃ周りの建物が全てぶっ壊れるだろうが！」

「なんだと！」

「おい、インデックスコイツは何なんだ。まさかこいつも魔術で出来た怪物か？」

上条はインデックスに答えを求めた。だが……

「とうま……これは魔術では無いんだよ！魔力が感じられないもん！第一、魔術で作られた者は自分の意志なんて持たないんだよ！」

「は？じゃあ、こいつは……。」



訳が解らない。と解りやすい表情を浮かべてる。

スタースクリーンは明らかに馬鹿にしている用に上から視線を向けた。

「うわゝ・めっちゃくちゃ。何なのよこれ。」

場の空気を引き裂く様に、ビルの間の裏路上から、常盤台のレベル5の超電磁砲<sup>レベルガン</sup>、御坂美琴がひょっこり出てきた。

「まさか、これもアンタの仕業？アンタさ、毎度の事とは言えどんだけのトラブルに巻き込ま・・・ってなんじゃこりゃー!!」

御坂もようやくスタースクリーンの存在にきずいた様だ。

「はん！これだから人間共はちっぽけで馬鹿なんだか。」

「何なのよ・・・。こいつは!」

「いいぜ教えてやる！俺は通りすがりのトランスフォーマー、スタースクリーム様だ！覚えておけ!」

どっかの特撮ヒーローみたいな自己紹介をすると彼は、もう面倒臭くなった様で帰ろうとする。

「トランスフォーム!」

彼は本日2度目のトランスフォームをすると、猛スピードで飛んで

行った。

5分後

今、この俺様は、驚いている。さっき、あの人間共から別れて此処に来たのは良い。だが問題はそうじゃねえ。

なぜ、『廃墟』だった建物が巨大な研究施設になっているんだ！？しかも、トランスフォーマー文字で『スタースクリーム様指定施設』って書いてるしよお！

おいおい、マジかよ。まさかこれも、あの神の仕業かよ……。

と、とりあえず、中に入ってみようか……。

これは……明らかにセイバートロン制だな。ん？なんかモニタに書置きが……。

『よう、元気にやってるか。この施設はこの街、いやこの世界の事をほとんど調べる事が出来る』

例えば、この世界の科学力、そして、『魔術』とか。

まあ、楽しくやれよ。後、世界の侵入者は、まだ表にでる気がないようだ。まあ、精々がんばれ

だが油断するな。油断すると死ぬぞ。この世界の力は凄いからな。お前は、正義の心を持って。

侵入者は悪の心に付け込んで、『洗脳』させる力を持つからな

それと正義っぽい事をするごとにお前にポイントをやろう。ポイントを貯めるほど、元の世界に戻った時

にさらにパワーアップしてやろう。

神より

□

洗脳！？冗談じゃねえ！この俺様が洗脳されてたまるか！

しかも正義の心を持ってだあ。やる気ねえ。だがそうしないと洗脳されるし。しょうがねえか。

なるべく。正義みたいな事しとこうか。ま、終わったらすぐ悪に戻るがな！！

・・・つか魔術ってなんだよ。

よし、次の部屋を見て回ろう。

30分後

武器室、リペア室、エネルギー補給室、牢獄室、会議室、休憩室、  
トレーニングルーム、などがあつた。

次はこの部屋で最後だな。

つて。なんじゃこりゃ。

おいおい、俺と同型の機体が数体転がってるじゃねえか！

あん？箱があるな。

どれどれ、中身は……はあ！スパークが入ってやがる……。  
なるほど。これをこの機体の中に入れて俺の部下の誕生って訳だ。  
ん、紙が入ってるな……。

『これは、私がかたばる直前のジェットロンのスパークをコピーし  
た物だ。』

そのため記憶も引き継いでいるからな。気をつけるよ。』

ふん！知ったこっちゃねーけどな。

まず試しにこの、2つの機体を起動させるとするか。

スパークを、ここに、こうすれば。完成だ。

ん？機体の色が戻ってきたな……。ってこの色……。

サンダークラッカーとスカイワープじゃねえかよ！

「う、うん？」

「なんだ此処は。確か俺はスタースクリームの野郎に宇宙に投げられて……。」

「あッ。テメエーはスタースクリーム！」

やべ。起きた。てかこいつ等若干、記憶引き継いでるやがるし、ここは俺様の上手い口で騙すとするか。

「ここで会ったのは百年目！お前のヒューズをぶっ飛ばしてやるぜ！」

「いくぜ！サンダークラッカー！」

「まてまて、お前ら。俺はお前らを助けたんだ。」

「はあ？」

「どつゆゝ事だ。」

「大体、宇宙に捨てられた奴がどうして、この地上にいるんだ。」

「「!!」」

「あと、お前らは俺に協力すればパワーアップする事ができる。」

「なんだと?」

「言っとくがお前らに拒否権は無い。今の俺は、お前ら二人掛かりでも、倒せないんだからな。もちろん5人でも10人でもだ。」

「うそくさいな。お前一人で、俺ら二人に勝てるって?」

「信じられないなら掛けてこい。証明してやるぜ。」

「な、舐めやがって!喰らえ!」

サンダークラッカーは得意技のソニックブームを発射させた。ふん所詮、無駄骨だな。

「ふん」バシユ

「なッ」

「痛くもかゆくもない。拳一つで跳ね返せたぜ!」

「今度はこっちだ!俺様のキックを受けてみるッ」ビュン

「ウアアッ」

ふん他愛もないな。

「後ろはもらったぜ!」シユン

「甘いな!」

「ウワアアア!」

「たつく。せつかくのワープ能力の使い手がこんなんじゃない。宝の持ち腐れだな。」

「つ、強い……。」

「く、くそ!コイツ……本当にスタースクリームか?」

「だから言ったんだ。拒否権は無いつてな。さあ、どうする。大人しく働くか、ここでくたばるかだ。」

「わかったッ何でもする。い、命だけは!」

はあ、あ、命乞いか。逆にこっちが気分悪いぜ

「ああ、いいぜ。おっとその前に、お前等を修理しねえとな。」

---

リペア リペア

---

「で、俺達に何をしろってんだい。」

「簡単だ。世界の侵入者の破壊と、正義っばい事だぜ。」

「はあ！？正義だと！おいおい、まさか地球人を守るってか。」

「そうだが。俺の調べによくと。厄介な事に、超能力を使う奴がこの街に余るほどいるらしい。恐らく

一部の地球人と対立する事は免れない。その時のために……。

「なんだ？それは。」

「地球人用のビームのメモリーだ。これをお前らのビーム砲に加えれば完成だ。」

「ビームを受けた地球人を気絶させる事ができる。」

「なんか、しょぼいな。それしか使っちゃダメなのか？」

「ああ。だが人間以外の兵器ならいいぜ。」

「そうか……。」

「……なんだかな……。」

「おい、何処に行くスカイワープ。」



「少し。外がどんな所か見に行くだけだよ。」

「あ。じゃあ俺も行くぜ。」

「お前もかサンダークラッカー。」

## 戦いとジェットロン（後書き）

どうでしたでしょうか？

説明不足だったりします。

なにか意見があったら言って下さい。

初出撃と法の書（前書き）

スタスク「これ以上遠くまで飛べない、イカトンボがいた。」

スタスク「この場所も悪くない。」

サンクラ「あの空は高くない。」

スカワ「この場所の良くはない。」

スラスト「・・・何これイジメ？」

## 初出撃と法の書

ここはスタースクリーム、サンダークラッカー、スカイワープの『ジェットロン』の拠点である。

普段、ここは第十九学区に有る為、目立つ事はないらしい。

そしてその中の休憩室では。

サンダークラッカーとスカイワープが居た。

サンダークラッカーは、地球の事を勉強するため。テレビを見ている。やる気の無い顔で。

スカイワープは、セイバートロン星の漫画を見ていた。

二人は暇を持て余していた。

「おい！！テメーら！早速初命令だ！！」

二人はビクウツと機械らしくない動きを見せる。

「な、なんだよ。」

「作戦会議だ！」

スタースクリーンは自慢げに言った。

なにせ彼は、デストロン全体では無いが念願のリーダーとなったからである。

そして彼はモニタに向かい、作戦を説明しようとする。

「まずは、この星の『宗教』について説明しようか。」

「宗教？あの、キリストのか？」

「ああ、そうだ。それは大きく三つに分かれている。

まずは『ローマ正教』。これはこの三つの宗教のなかで最大の組織だ。かなり人数が多いらしい。

そして『ロシア成』。教幽霊狩りに特化し、心霊的な事件の解析や解決を専門としている。

最後に『イギリス清教』。魔女狩りや異端審問といった対魔術師の分野に特化しており、その実働部隊として「必要悪の教会」を有している。

「そこまでは良いか？」

「・・・解ったが良く調べたな・・・。つーか色々意味分らん言葉があるが」

「おいおい、サンダークラッカー。この基地にはこの星の事がほと

んど解る、データバンクがあるんだぜ。」

「便利だな……。」

「話を戻すが。その全宗教は魔術師も有しているんだ。」

「はあ！魔術ウ！そんな非科学的な……。」

「落ち着けスカイワープ。俺も最初驚いたが、事実らしい。でその魔術の使用法は魔道書にのってるらしいが。」

人間はそれを見ると、死にいたるらしいぜ。」

「じゃあ、なんで使える魔術師がいるんだ？」

「サンプルがあるんだ。それを見て学んでるらしい。で、その魔道書の中に『法の書』というのがある。」

それを解読すれば、宗教の世界が終わると言われてるらしい。」

「すごい力を得られる。つー事か？」

「で、それがどうした。」

「いままでそれは解読できる奴は居なかったんだが。解読した野郎がいるらしい。」

で本題はソイツを俺達が手に入れるって事だ。」

「……………マジ？」

「ヒューズがぶっ飛びそうだぜ……………理由は何なんだ？」

「ソイツを手に入れば、魔術に対する脅威が消えるって訳だ。」

「おいおい。この前まで正義っぽい事するって言ってたじゃないか。」

「何言つてやがる。いずれ『法の書』を巡って戦いが起きる、だがそれを止める事が出来る。」

「一石二鳥じゃねえか。」

「じゃあ、もし地球人が法の書を取り返しに、戦いを仕掛けてきたらどうする。」

「なァーに。その時は宇宙に逃げれば良いって事よ。」

「なるほど。それなら安心できるな。」

「俺達は何をすればいい。」

「最初は『法の書』を解読したシスター。『オルソラ』アクイナス』を保護すればいい、奴らにとっちゃソイツが居なければ。法の書はただの紙くず。宝の持ち腐れだ。」

「で、ソイツの居場所は？」

「都合が良い事にこここの近くに居るぜ。」

「楽そうだな。」

「ああ、じゃあ、ジェットロソ、出撃！」

「「おじー」「」」

とある博物館

---

「どう言うことだよ！なんで誘拐ごっこなんてやってんだ」

「なんだ、バレてたのか。いやなに、君に行方不明の人間の搜索を手伝ってもらおうとね。」

ここでは、上条当麻、インデックス、ステイル、アニエーゼ、そして行方不明だったオルソラが居た。

「そうさく？」

「アー、大丈夫大丈夫。君の隣にいるシスターをこっちに引き渡してくれれば。」

「はい？」



「だーから。そのシスターが行方不明の探し人、オルソラ<sup>II</sup>ア  
クイナスだよ。はい、お疲れ様。君はもう帰っていいよ。」

「あー、あのこの炎天下の中歩き回った私めの立場は?。」

「だからお疲れ様と言ってるじゃないか。なんだ? カキ氷でもおご  
つて欲しいのかい?。」

上条はそれを聞いて拳を握った。

「これまではさ、話が仲が合わないと知っていながも、仲良くやっ  
ていこうと思っていたんだ。ああ! この瞬間まではなあ!。」

だがステイルは上条に煙草の煙を吹きつけた。

「うっ! うっ! うっ!」

「君はもしかしてかまってほしいのか?。生憎僕は君の寂しさを満  
たす事は出来ないし、したくもない。さっさとオルソラをアニメー  
ゼに引き渡せ。」

だがそこに

「そつはさせねえぜ!」

そんな言葉と共に3体のロボットが空から降りてきた。ズシン!と

音が響く。

「「「「「！！！！」」」」」

「あ！お前は確か・・・シュガースクリーム！」

「違う！！スタースクリームだ！！名前ぐらいちゃんと覚えやがれ  
」！」

「どうでもいいが。そのシスターをこっちに渡してもらおう。」

二人が騒で居る間。スカイワープは話を切り出す。

「なんなんですか！貴方達は！」

アニーゼが叫ぶ。

「この女は俺たちの為、世界の為に少し借りたいのだ。」

「法の書を・・・・。利用するのでございますか？」

さつきまで、上条を睨んでいたスタースクリームはこっちを向いた。

「ああ、俺達は法の書絡みで争いが起きるのを止めに来たのだ。」

「では・・・、何で私が必要なのでしょうか。そうなら直接法の書を奪えば・・・」

「それは俺らが利用するからだ。それを悪を倒すことに使う！」

スタースクリーンは都合のいい理屈を付けた。自らのパワーアップの為。

だがその時。何処からともなく声が聞こえてきた。

『いやいや、そう簡単に引き渡されては困るのよな。』

『オルソラ!! アクイナス。お前は天草式と共に有ったほうが有意義な暮らしを送ることが』

できるとよ。』

「天草式!?!」

アニエーゼが口を開いた時はもう次の一手が忍び寄っていた。

オルソラの立っている地面に穴が空き、オルソラは穴へと落ちていく。

「オルソラ!?!」

上条は叫ぶ。

「く、くそつたれが!」

スタースクリーンは穴に銃口を向けたがもう遅かった。底には誰も居ない。ただ暗闇が広がっているだけだった。

「……おいステイル。一から説明する気、有るんだろうな。」

「説明なら……僕のほうが求めたい位だね……。何なんだこいつ等は。学園都市の差し金か？」

「チツ。」

「ねえ。貴方達も目的が一緒なら協力する気は無いの？」

「い、インデックス！」

インデックスが提案する。

「どうするよ……。スタースクリーム」

「しょうがねえ。一時お前らと協力してやる。」

「俺のヒューズが吹っ飛ぶのも時間の問題かもしれねえ……。」

---

今空は暗く、月明かりが美しい夜である。

ここには、アニメエーゼが率いる、200人以上のシスターが集合していた。

だが皆、巨大なロボット3人組、『ジェットロン』に驚いている。

「なんですか……。この機械は……。、」

「話じゃ、宇宙から来たロボット生命体らしいです……」

「え！宇宙ですか！」

「シツ静かにしなさい。」

シスター達はヒソヒソしている。

そんな中スタースクリームは呆れていた。

「俺はリーダーのスタースクリーム様だ。」

「俺はスカイワープだ。」

「サンダークラッカー。」

何となく3人は自己紹介してみたが何でしたのか自分らでも分らない。

そんな時

「~~~~~！~~~~~！」

あつちで何か騒ぎが起きていたが無視することにした。

5分後

「現状。オルソラII アクイナスは確実に、天草式の手に有ります。今回の件で出張ってる天草式の数は推定で50人弱。今は地上に上がっちゃってる可能性も・・・。」

「つまり何にも分んないって事なのかな？」

「魔力の痕跡から、天草式の動向をおつていやすが・・・。」

そんな険しい空気の中、スタースクリーンが口を開く。

「それなら心配は無いぜ。奴らの居場所は・・・。此処だ。」

スタースクリーンは薄い軽量型のモニターを見せた。

そこには地図と赤い印があった。

「奴らは此処にいるぜ。」

「な、何故解るんですか？」

「心配なら確認を取るか？なあ、禁書目録さんよお。」

「！」

スタースクリーンはデータバンクから調べた事を禁書目録であるインデックスにふった。

もちろん。インデックスの事もデータから調べ上げたのだ。

「・・・。そうなんだよ。」

「天草式は特殊移動法が有るけど、それは特定の場所しか無理だしそれが使えるのは日付け変更時だからまだ余裕が有るんだよ。」

「それでその特定の場所が……。」

「此処って訳だ」

---

時間は経ち、シスター達は泊まるため、テントを張っていた。

だが、ジェットロン達はロボット。いくら感情が有るからと言って寝る必要などまったくくないのだ。

「まったく、邪魔くさい物張り巡らしやがって。」

サンダークラッカーが悪態を突いた。

なにせ大きい彼らにとっては、凄く歩きにくいからしょうがないが。

「スタースクリームとスカイワープの奴……俺だけ置いて、偵察に行きやがってよお」

だが、そんな彼に容赦なく災難が起きつつあった。

「ちよつと良いかな？」

「あん？」

「あなたは何処から来たのかな」

インデックスが質問してきた。

「機械惑星のセイバートロン星からだ。」

「フーン。じゃあ、貴方達は宇宙の機械なんだね。」

「そうだ」

「わかったんだよ。」

インデックスはスタスタと何処かにいった。

ふう、と落ち着いて居たのはつかの間。2000人以上のシスターの半分以上が押しかけてきた。

「うお！」

次の瞬間質問の嵐が吹雪いた。

「アナタハナニモノデスカー」「ヘンケイスルンデスカー」「オシエテクダサイ」「オオキイ」「カツコイイデス」

「ウア~~~~~！いつぺんに喋るな！順番に！ゆっくりと！じゃないと俺のヒューズがぶっ飛ぶ！」





「「「「「!」「」「」」」」」

その振動でさつきまで上条達に注目していたシスター達が一斉にこつちを向く。

「く、くそなんだ。このオチは、ウグツ」

彼は何とか立ち上がろうとする。

「だ、大丈夫ですか？」

アンジェレネが心配そうに声を掛けてくれた。

「あ、ああ大丈夫だ。」

少し嬉しかったのかは分らないが、笑顔で答えた。

「不幸な奴だなあいつも・・・」

サンダークラッカーはテントの中に手を突っ込みインデックスにガミガミ噛まれてる上条を救出。

「おい、ダイジョブか？」

彼は上条をメートル以上もある自分の顔の位置にぶら下げた。

「だ、ダイジョブでは・・・ないです・・・。」

上条を陸に下ろした後、

「おい、その背が高いお前。その二人を助けてやれ。」

サンダークラッカーはシスタースチアに命令した。

「わかりましたが……。あなたの方が大きいですよ。」

「……………こりゃ一本取られた。」

「……………。」

「皆なんか言えよ。虚しくなる……。」

その時スカイワープとスタースクリームが戻ってきた。

「悪いなサンダークラッカー。これは土産だ。」

スタースクリームは液状エネルギーをだした。

「ああ、サンキュ。」

サンダークラッカーはそれを一気飲みした。

「どうした？疲れてるみてえーじゃん。」

「まあ、色々あってな。」



初出撃と法の書（後書き）

はい、？期らへんから始めました。

単にメンドクサカタだけかもしれない・・・。

天草式と正義の心（前書き）

インデックス「さんだーくらっかーって地味なんだよ！」

サンクラ「き、貴様。俺が気にしてる事を！」

インデックス「でも安心なんだよ！」

サンクラ「？」

インデックス「作者が出番増やしてくれるらしいんだよ！」

サンクラ「マジ？ヒューズがぶっ飛びそうだ。いい意味で。」

上条「その幻想をぶちk「ヤメロ。」

## 天草式と正義の心

「パラレルスイーパーパークで天草式本体を発見しました。ですが法の書とオルソラは発見できませんでした。」

アニエーゼは現状を発表した。

「まさか、オルソラはもう・・・」

上条が心配そうに言うが

「いや、それは無えな。奴らが法の書が目的でオルソラって奴を誘拐したなら。逆に奴は安全って事だ。」

とスタースクリームは真っ先に否定。

「我々はお取りになって正面から天草式と激突します。その間に貴方達はパーク内を探索して。法の書とオルソラの身柄を確認できたら、確保しちまってください。」

アニエーゼが作戦内容を発表する。

「特殊移動を破壊しないとオルソラを連れて逃げられるかも。」

インデックスは推測した。

「移動の渦は、午前0時になるまで破壊出来ないけど。」

「渦の有効な時間。即ちタイムリミットは五分間だけでしたよね。」

0時5分を過ぎても見つからなかった場合は、脱出しちまってください。我々の手で天草式を無力化したあとに園内を搜索しちまいます。」

「やることが多いな。骨が折れそうだ。」

「スカイワープ。テメエはワープ能力が有るじゃねえか。ソイツを見つけてワープで逃げれりゃ簡単だろ。」

「……あ。いや、あれは奥の手って奴だ。そう簡単に使えもんじゃない。」

スカイワープは一人で頷いている。

（絶対忘れていやがったな。）

（お前のヒューズはどうなってんだ？）

（忘れてんだろ）

（気がたるんでるじゃないか？）

（ロボットって私みたいに完全記憶能力とかないのかな？）

（頭がイカレちまってるんでしょうか？）

「でも、確かに窮屈なスケジュールになりそうだ。」

ステイルが悪態を突き、銜えていた煙草を吐き捨て、踏みにじる。



その表情は面倒と言う感情よりも怒りが強調されていた。

アニメーゼが手を揚げる。その動作でさっきまで、武器の手入れをしていた。シスター達は一斉に立ち上がり、戦いに行く覚悟を決めた。

その中の一人のシスターが、アニメーゼに杖のような武器を渡すとアニメーゼは

「許せねえですよ。十字教つてのは本来皆を助ける目的で広めていった物なのに、それを逆手にとってこんな事の為に力を使っちゃうなんて。」

彼女の表情は怒りに満ちていた。それは誰が見ても分るが。

「ま、天草式つて奴らも、深い事情は有ると思うがな。奴らもお前らと同じその十字教だしな。」

スカイワープは事情が有るんじゃないか？そんな感じで言う。

そんな中アニメーゼはジェットロンの警戒の視線を向けていた。

何故なら、彼らもオルソラと法の書が目的で行動している。だから見つけたあと、抜け駆けされるのが心配だからだ。

その視線にジェットロンのリーダーがきずいた。

「なんだ？俺らが抜け駆けするんじゃないか？なんて思ってたのか？それは無えな。多分あの女は、信用出来ない奴には死んでも言わねえと思うがな。そうだ、『サイバトロン』見たいにな。」

サイバトロン。それは昔彼らと対立した正義の軍団である。

サイバトロンと言う言葉の意味は、彼以外スカイワープとサンダークラッカーしか居ないがつい、口に出してしまった。だがそれほど正義と言う言葉に縁があるのだろうか。

---

「おいステイル」

「なんだ」

「お前、本当に時間内に全部の仕事を片づけられると思うか？」

「正直、厳しいだろうね。」

その返答で上条はやはりと言う表情をした。

「実はローマ正教に伝えていない情報の一つある。」

「え？」

「イギリス国内に居たはずの神裂火織が消えた。」

「神裂が？」

「恐らく、かつての部下、いや仲間を思つての行動だろ。天草式に決定的なダメージを与えようすれば、あの聖人が襲ってくるかもしれない。だから全ての仕事を成功させようと思うな。」

神裂火織。世界に20人も居ない『聖人』である。

「だったら、最優先はオルソラでいいか？」

その言葉にインデックス、ステイルは少し驚いたが、すぐ話に戻した。

「・・・別に構わないさ。解読者が居なければ、法の書は宝の持ち腐れだ。」

「私もそれでいいと思うよ。とうまはダメって言つても勝手に突っ走っちゃうに決まつてるもん。ただでさえ人数少ないんだから。皆で纏まらないとね!」

インデックスは上条当麻を良く知っている。上条は人を助ける為ならば自分の事など気にせず前に突き進む人だからだ。

「わかった。」

上条の言葉にインデックスは笑顔で頷いた。

「ありがとな。」

「突撃前に、気を殺ぐような気持ちの悪い事を言つな!」

その時、遠くの方で戦闘が始まり、爆発音が響いてきた。

「!・・・。要道が始まった!」

「行こう!」

上条のの言葉にインデックスは心を引き締め、頷く。

彼らは、フェンスを上り、中に侵入する。

だが・・・

そう簡単には行かない。

数人の天草式の人間が、斬り掛かってきたのだ。

「ふせろ!」

上条はインデックスを突き飛ばしたおかげで、斬られる事は無かったが安心はできない。

「君にやる!」

スタイルはイギリス製ケルト十字を上条に渡す。

「これは?」

上条は訳が解らない。

「死にたくなければ。離さずもってる!」

上条は説明を求めたが天草式がそうはさせなかった。

上条は、天草式の攻撃を急いで避ける。

「と、とうま！」

インデックスが駆け寄ろうとしたがステイルが止める。

ステイルは自らの魔術の発動させる事ができる『ルーンのカード』を備える。

天草式の男が二人を斬りつけた。だが彼が斬ったのは『塵気楼』だった。

ステイルが魔術を発動させた為である。

「なにッ」

「ステイル、インデックス！……って逃げるなら合図とかしねえかな普通……。」

天草式は二人が逃げた事を確認すると、上条に視線を向けた。

「結局……。またお取りかよー！」

上条は走り、敵はそれを追ってくる。

上条は分かれ道を右に回り丁度あった市販よりの車の陰に隠れる。

天草式はまんまと引っかかり上条は、何とか巻いたみたいだ。

「フウ」

上条は安心して立ち上がった。が何時もの不幸の為か、横に置いてあった木箱を蹴ってしまい、大きな音が鳴った。

「うわッ」

そして近くにいた天草式の女は見事にきずく。

「！」

そしてまたもや斬り掛ってくる。

上条は覚悟を決めたが、

刃は刺さる事はなかった。

バシユンツと何かが放たれる音が鳴り、それは天草式の女に当たった。

「きゃッ」

バタリと倒れこむが、上条は反応し地面に頭が激突するのを避けようと頭をかばった。

上条は横を見るとスカイワープが居た。

「よう、兄ちゃん。今日は着いてるかい？」

「お、お前まさか、コイツを……。」

「大丈夫だ。気絶してるだけだからよお。」

「はあ、ならいいけど。」

上条は戦利品、とは違うが一応彼女が持っていた武器を手を取った。

「それにしても。ステイルとインデックスは大丈夫か？」

「なんだ？はぐれたのか？おいおい、勘弁してくれないかね。」

「すまねえな、助けてくれてありがとよ。ったく、オルソラは一体何処に。」

「にしてもお前、初対面の人になれなれしくねえか。まあ、良いけど。」

「いや、つかお前人じゃねえだろ。」

そんな事を話している内に、誰かが上条の腹部目掛けて突っ込んできた。

「づぐづくはああー！」

ゴシャと地面に叩きつけられた。

「あ、コイツは！」

「？」

上条が確認すると、それはオルソラだった。だが、魔術で身動きが取れないよう細工してあった。

「！。~~~~~！~~~~~！」

「オルソラ？」

「おいおい、何か縛られてるぜ！」

上条は安心したように右手でオルソラに触れ、幻想殺しが発動し魔術を打ち消した。

「はッ貴方はバス停でお会いした。それとあなたはあの時の・・・何故こんな危険な場所に？」

「お前を助けに来たからに決まってるんだろ。」

「！。あの、本当に赤の他人の私を助けに？」

「ああ」

「あの、お二人とも、お世話様でございました。」

「それは、そうとこんな所で何やってんだ。」

「混乱の乗じて、何とか抜け出す事ができたのでございますけれど。」



「  
ふん」

上条はオルソラの手を右手に触れ、完全にオルソラは身動きが取れるようになった。

「あ、ありがとうございます。けどこれはどうやって？」

「ん、そう言う能力を持つてるだけなんだけど。ややこしくなるから変な説明しない方が。」

だが

「居たぞ！あそこだ！」

一緒に居たスカイワープが巨大なロボットな為見つかってしまった。

「チツ喰らえ！」

スカイワープは人間用ビームで天草式の人間を気絶させた。

「あ、あのその方たちは……。」

オルソラは心配そうに見つめるが

「はあ。何度も言ってるが安心しろ、気絶しているだけだ。」

本日2度目の説明である。

「まあ、特殊移動法は午前0時5分までしか使え無いから、ここで粘るのもいいんじゃないかねえか。」

「いや、お前がでか過ぎて目立つんだが。」

「あら？」

「ん、どうした。」

オルソラはポケットから、ハンカチを取り出し。

「夏風を引いてしまつのでございますよ。」

そう言いながらオルソラは、上条の顔の汗を拭いてあげた。

「ッ」

上条は驚くが、それをみてスカイワープは、

「これは人間にとって挨拶的な事なのか。」

「違うわー！」

上条は叫ぶ。

「所で貴方様方はローマ正教と何か関係が？」

「俺は全く関係は無い」

「では、貴方は……。」

「・・・まーイギリス清教に知り合いがな。」

「つまり貴方様はイギリス清教の筋をお持ちなのでございますか？」

「い、いやそんなんじゃないよ。」

「・・・さようでございますよね。貴方様のような方は、私たちの様な教会世界に、関わりを持たない方がよろしいに決まっていますのでございましょう。」

「確かにな。俺がこんな物持っても仕方ないけど。」

上条はステイルから受け取ったケルト十字を出した。

「わあ、これはイギリス清教のお知り合いから？」

「ああ。良かったらお前が預かっててくれ。俺には価値なんて解らないし。」

「よろしいのでございますか？」

「ああ。」

「はあゝ。一つだけお願いがあるのでございます!」

オルソラは余程嬉しいかったようだ。

そして上条の手を両手で包み込む。

「な、なんだよ！」

「貴方様の手で私の首に掛けてもらえないでございましょうか！」

「か……。構わねえけど……。」

オルソラはそれを聞いて喜びながら首に掛けてもらおうと顔を前に出した。

「な、あ、！」

上条は何かしら凄く緊張している。

上条は凄くタメライを覚えた。

「どづしたのでございましょう。」

妙に優しい声で急かしてくる。

「な、何でもありませんッ」

上条は勇気を振り絞り、ケルト十字を掛けようとした。

今見ると、顔と顔の距離が凄く近く、少しでも近づくとも肌が触れ合いそうだった。

そして緊張しながらもオルソラの首にケルト十字を掛けてあげた。

掛け終わると上条は真っ先に柱に凭れかかる。

余程気力を使ったのだろう。

そしてさっきまで空気と化していたスカイワープが口を開く。

「キス……ダー……」

スカイワープの言葉を上条は必死に妨害した。

「そう言えばお前、法の書を読めるらしいな。」

「暗号文と言いますか、暗号文の解読方法で……は！」

オルソラはスカイワープを警戒した。

「はあ、いや違っただけ俺はな、どうしてそんな物に手を付けたか知りたいだけだ。世界を変えられる本だろ？」

スカイワープの言葉にオルソラは答える。

「……力が欲しかった。と言う事で間違いないのでございます。魔道書の力なんて誰も幸せにしないのでございますよ。」

「それを巡って、争いしか生まなかつたのでございます。」

オルソラの表情にわ何処か、後悔の念があつた。

(……一応スタースクリームの言う事は正しかった様だな)

「ですから私は魔道書を壊す仕組みを、調べたかったのでござい  
ます。」

だがその時。近くから爆音が響いた。

その瞬間、はぐれたステイルが上から落ちてきのである。

「ステイル！」

「何をしている……。早く逃げろッ」

そしてまた上から『何か』落下し粉じんが舞う。

「なぐをやつとんのよ。イギリス清教の神父様?。」

「ホオーラ。英国紳士の誇りは何処いった。この、建宮齋字に見せ  
てみるよ。」

「くそッ」

いかんよなあ。そんなんじゃ、女の一人も守れんぞ。」

インデックスのいた。彼女は心配そうにステイルを見つめている。

「チッ」

ステイルは舌打ちをしながら煙草を吐き捨てた。

「お前、インデックスを守りながら!?」

「余計な事は考えるな！オルソラ！アクイナスは確保できているね。相変わらずその悪運は幸か不幸か判別し難い物だ。」

「何度も説明した筈なんだがな。オルソラ！アクイナス。我々は貴女に危害を加えるつもりは無い。」

「確かに、貴方様のお言葉は希望に満ちていたと存じ上げるのでございますが。武器を振り回しながら訴える平和など、信じられないのでございますよ。」

「無念だな。ローマ正教に戻っても仕方が無いだろうによお！」

その瞬間、上空から、スタースクリームとサンダークラッカーが降りて来た。

「よお〜う。スタースクリーム様の登場だ！」

「遅エよお前ら！」

「フン、丸腰か。・・・！」

だが建宮は上条がもっている剣に目をやった。

「その剣。浦上から奪ったもんか。」

「安心しろ。気絶ですましてやったからよ。」

スカイワープが答えるが、それは逆効果だった。

「・・・死ななきゃ良いって訳じゃないのよ。舐めてんのかテメエ等は!!」

「てめえがそこで、誰かの為に戦える人間なら、剣を退いてくれねえか!」

上条は提案する。

「俺は出来れば。てめえみたいな奴と戦いたくない。」

「そうしたいのは山々なんだ。我らの敵はローマ正教だがそこに繋がりを持っているなら。イギリスとて見逃せんのよなあ!」

「舐めてんじゃねえぞテメエは!」

「そう言う風に睨まれたら悲しくなっちまうじゃねえの。」

だが、やるってんなら仕方がねえ。今日がお前さんの命日だ!」



天草式と正義の心（後書き）

次はサイバトロンの出そうと思います！

## 嘘とサイバトロンの参戦(前書き)

ハイド「もう我慢できん！引きずりおろして細切れにしてやる(作者)」

自分「はっはっは。やってみ・ギヤアアアアアアアッ！」

スタスク「あれ？ジェットロンは？」

## 嘘とサイバトロンの参戦

天草式の教皇代理、建宮斎字が上条に斬り掛る。

上条、とステイル、そして敵である建宮との戦闘が始まる。

「チッ」

スタースクリームが建宮に銃口を向けた。その時

「喰らえ！」

「又アッ」

ズゴンツと何者かがスタースクリームにハイキックを喰らわせ。

もう一人がスタースクリームにビームを撃った。

それは

赤を強調させる戦士と白を強調させる戦士だった。

「す、スタースクリーム！」

スタースクリームはキックと銃撃を一気に喰らったため気を失った。

「お、お前らは、アイアンハイドに、プロールじゃねえか！！」

二人のサイバトン戦士が、二人のデストロン戦士に立ちふさがる。

「な、そつちにもロボットが?!」

上条が叫ぶ。

「悪いな。イギリス清教。ロボットを雇ってんのは、そつちだけじゃないんでな。」

建宮が容赦なく、上条に攻撃を仕掛ける。

「ふん悪いがデストロン。俺達は天草式に協力しているんでね。一回くたばってもらおう!」

「くたばるのはお前等だ!サイバトロン!」

サンダークラッカーとプロール。スカイワープとアイアンハイドの戦闘が始まった。

ジェットロンの二人はビーム砲を『人間用』から『通常』に切り替えた。

4人のビームが交差し、直撃する。

「ツク。オラア!」

4人は銃撃戦から接近戦に切り替え。殴り合いが始まる。

「なんでだ!正義が何故あんな、奴らに協力する!?!」

「それは、お前らが間違っているからだ！」

「何?!」

「間違ってるのはテメエらだろうがよ！」

「貴様らは、この後あのシスターがどうなるか解ってないようだな  
！」

「知った事か！」

「ならしょうがない。引きずり下ろして細切れにしてやる!!」

アイアンハイドの腕がノコギリに切り替わりスカイワープを斬りつける。

スカイワープはギリギリワープ機能でワープし回避する。

両軍は、ほぼ互角だった。この戦いを左右する徹底的な物が無いからだ。

だが、勝利の女神はジェットロンに微笑みつつあった。

「うっ、うぐっ」

さっきまで倒れていたスタースクリームが目を覚めたのだ。



「おいおい、それじゃ俺達がやった事は、無駄って事か？」

「いや違うな。俺達が正義っぽい事をする」と『ポイント』が溜まり、  
「パワーアップ出来るんだよ。」

「……なんで正義っぽい事なんだ？」

「細かい事はきにすんな。」

「ふん。残念だな。お前等は良い事などしていない。」

『電子手城』で縛られてる。プロールはそういった。

「あん？どう言う事だ？」

サンダークラッカーが問いかける。

「解った説明してやろう。オルソラは殺される。」

「な、んだと……。」

一番反応したのはスカイワープだった。

「奴らはお前らに嘘を言っていた。法の書が盗まれたなんて、真つ赤なウソ。あの本を解読すれば、十字聖教が終わる。そんな事を口ーマ正教が望むと思うか？あのシスターは秘密裏に殺される事になる。だが本人がそれにきずき、天草式を私たち二人に助けを求めた

のだ！」

「はんツ。それはそれでいいんじゃないか？ま、正義っぽい事はまた後でやればいいんだし。なあ、サンダークラッカー。」

「それもそうか。」

「いや、俺は行く。」

「……！」

スカイワープはそう答えた。理由はさっきまで仲良く話していた。奴を見過ごす事に気が引けたからである。

そしてその表情からもう決めた。と伝わってきた。

「……しょうがねえな。解ったよ。もしもお前が死んだら、部下が減るからな。」

スタースクリーンはそう言った。さり気なくいったが何処か、重みがある言葉だった。

「……ふう。」

サンダークラッカーは手元のリモコンで、サイバトロンの電子手城を解除した。

「！お、お前」

「どうやら、もう決まったらしい。人数が多い方が楽だろ？まあ、



そうじゃなかったら今頃お前等のヒューズをぶっ壊していたがな。」  
サンダークラッカーは笑いながら言う。

(・・・なあ、プロールコイツら本当にデストロンか?)

(ああ全くだ。気味が悪い。)

6分後

ジェットロンは、天草式の人間が、捕らえられている所に来ていた。見張りに10人のシスターがいた

「貴方がたは・・・。」

「何しにここへ？戦闘ならとつくに・・・キャッ」

サンダークラッカーが『人間用』ビームを撃つたため、シスターは気絶する。

それに周りにいた九人のシスターがきずき戦闘態勢をとつた。

「な、何をするんです!」

「貴方達は見方じゃ・・・」

だがスカイワープはそれを遮る様に言う。

「良くも騙してくれたな。くそつたれ共。」

「くくく！」「くくく」

三人は素早く九人のシスターを撃ち、気絶させた。

「おい！大丈夫か！」

アイアンハイドとプロールが天草式に駆け寄る。

「貴方がたはアイアンハイドさんとプロールさんじゃないですか！  
それに、敵の人も・・・」

天草式メンバーの五和は驚いた様に言う。

「助けにきてやったぜ。俺様に感謝しろよな。フハツハツハツハツ」

さっきまで敵対していたくせにこんな事を平気で言うそれがスター  
スクリーンであるからしょうがない。

そして

「なんだ、もう助かってるようなのよな。」

「教皇代理！」

建宮斎字も来た様だ。

いまここで天草式が全員集合した。

オルソラ教会

「一応言うけどよ。もう、誤魔化す気は無えんだな？」

上条は、オルソラを助ける為、一人で敵地に攻め込んでいた。

相手はアニエーゼを含む200人以上のシスター。当然勝てる見込みは無いが。

上条はそう言う事にも首を突っ込む人間なのである。

「誤魔化す？何を？この状況を見て解んねえんですか？つたく、どうやらイギリス清教とデカ物は逃げ帰っちまったみたいですけど。貴方は一体なんなんですか？」

「ほら、これが最後のチャンスです。自分が何をすべきか位、解っちまってるですよね？」

アニエーゼは問いかけた。

「そうだな。確かにこれが最後のチャンスだ。良くわかってるよ。」

「……. . . . . だったら」

二人は睨み合う。

そして上条は先手を取り、アニエーゼを右手で殴ろうとする。

拳はアニエーゼに飛んだが。アニエーゼは腕でガードする。

「き、貴様！なんのマネだこれはッ！」

アニエーゼは上条が予想外の行動をし、自分の邪魔になる。と言っ  
が図った。

上条は拳を握る。

「何をすべきか、だと？舐めやがってッ。」

「……………」

「助けるに決まってるだろうが！！！」

オルソラはボロボロな体で驚ていた。

「…………面白いですよ。貴方。この状況で一人に何が何処まで出来  
るのか…………見せてもらう事にしましょうかッ！」

リーダーであるアニエーゼが構えると周りのシスター達も武器を構  
える。

だがその時！

ズドンッ。爆音がなり壁が吹っ飛ぶ。その爆風で数人のシスターが吹き飛ばされた。

その爆発の原因は、

「まったく、勝手に始めないでほしいね。」

ルーンの魔術師、ステイル「マグヌスだった。」

「ステイル?!」

「い、イギリス清教!」

アニーゼはさらなる予想外に戸惑った。

「馬鹿な、これはローマ正教だけの問題なんですよ!」

「はぁ? 残念ながらそれは適用されない。」

ステイルは真正面から否定した。

「オルソラ! アクイナスの胸を見る。そこにイギリス清教の十字架が掛けられているだろう?」

彼女の胸には、イギリスのケルト十字がある。

「それを誰かに掛けてもらう行為はそのまま、イギリス清教の庇護を得る。つまり、オルソラ! アクイナスなローマ正教では無く、」

「・・・!」

「僕たち、イギリス清教の一員になったって事さ。」

スタイルはズバリ、と言った。

「そっか、それで……。」

上条は納得したが、アニエーゼはしなかった。

「そんな事が通じるとでも思ってますか！」

「思っちゃいない。だが君たちローマ正教の一存のみで彼女を神門に掛けると言うなら。」

スタイルは高い位置からジャンプし地面に着地する。

「イギリス清教はこれを黙って見過ごし訳には、いかないんだよ。それと……。」

スタイルの表情は怒りに満ちた。

「良くもあの子に刃を向けてくれた物だ。この僕がそれを見過ごすほど、甘く優しい人格をしているとでも思ったかッ」

その理由の中には、インデックスに攻撃した。という個人的な理由もあった。

「チィ。一人が二人に増えた所で「二人で済むとでも思ってたんじゃないのよ。」

また壁が破壊された。

「俺が戦う理由は、わざわざ問う必要はねえよなあ」

建宮斎字率いる天草式十字聖教も参戦する。

さらに、3機の戦闘機と、2台の車が壁を打ち破る。

「トランスフォーム！」

スタースクリーム、サンダークラッカー、スカイワープ、アイアンハイド、プロールの5人も現れる

「ったくよ。てめえも愚か者だな。せつかくお前が仕掛ける前に、突撃しようとしたのによお。」

スタースクリームは半分笑いながら喋る。

そのほか4人の表情は引き締まっていた。

「だから、当麻が来る前に私たちが決着をつけるから良いよ、ッて言ったのに。」

1万3千冊の魔道書を記憶する。禁書目録もだった。

「チイツ。殺せええええええッ！」

その合図と共にシスター達は総勢で襲いかかる。





二人は避けれたが、サンダークラッカーには直撃した。

「いでッ。な、何しやがる!!」

サンダークラッカーはビームを乱射する。

ビームはシスターに直撃し、数人氣絶した。

そんな中スカイワープはある事にきずいた。

上条が高い位置からオルソラを抱えて、近くの建物に飛び移ろうとしていた。

そして、上条は覚悟を決める暇も無く、ジャンプする。

「あ、あいつ!」

スカイワープが全速力で向かいキャッチした。

「ふう、今日は着いてるかい？兄ちゃん。」

「はは、また助けられちゃったな。」

「ん?」

スカイワープがオルソラに目をやった。

(・・・ひどい傷だな、一体どんな拷問をさせられたんだか。まあいい。)

「おい、不幸少年。」

「は、はい?」

「コイツは俺が守ってるから。お前は、親玉を倒しに行け。」

「……わかった……。」

オルソラ教会

教会の奥の部屋でアニエーゼ含む数十名のシスターが居た。

外から爆発音や轟音が鳴り響いていた。

アニエーゼ以外のシスターは、かなりこの後どうなるか心配のようだった。

「ヒキズリオロシテコマギレニシテヤル!」 「……キヤアアツ」  
「ドーン」

そんな物凄い物騒な言葉も聞こえてくる。

シスター達は段々怖くなって来たようだった。



## 嘘とサイバトロンの参戦（後書き）

サンクラ「お前、なんだか正義っぽい事言っただよな。」

スカワ「・・・そうか？」

スタスク「まさか・・・いやそれは無いな。ロボットが人間にこ・・・」

スカワ「だまれい！」  
「ビシ」

スタスク「アベシッ」

決着と始まり（前書き）

スタスク「お前ってでこ広いな。」

アニメーゼ「へ？そうですか？」

スタスク「むしろそれがチャームポイントかもしれないな。」

アニメーゼ「……………// // // //。」

## 決着と始まり

「くそ、きりが無えのよッ。」

建宮とステイル、そしてインデックスは苦戦していた。

倒しても倒しても現れる敵にだ。

「しょうがねえだろ。相手は200人以上だからな。」

スタースクリームは面倒くさそうに言う。

そんな時。

「こつちだ！」

上条は皆に建物の中に逃げるよう命じた。

4人+5機が中に入る。

「取りあえず、全員無事みたいだな。良かった。」

プロールは一先ず安心した。

「おい、歩けるか？」

「はい、大丈夫なのでございますよ。」

「そうか。」

スカイワープはそれを聞いて、オルソラを地面に降ろす。

だが教会の扉も壊されつつあった。

「くっとうする。」

「わ、私の魔滅シエオールファイアの声もあんな、風に耳をつぶされちゃ効果が無いと思っし……。」

「ゲエツ。あいつ等まさか自分で耳を潰したのかよ。ヒューズがぶっ壊れてんじゃねえのか！」

サンダークラッカーは驚愕の事実にも、どん引きする。

「まあ、いずれにせよあいつ等、自滅覚悟で襲ってきている。油断はできんよ。」

プロールが言う。

「もしも……。」

「「「？」」」

「もしも、この場に法の書があれば、活路が見出せるかもしれないのでございませうけど……。」

「……確かに。法の書に書かれた『天使の術式』。その封を解くと宣言するだけで、交渉に使えるだろうが。」

「だが、法の書が盗まれたって言うのは、うちらをはめるための自作自演だったのよな。」

「となると、原典が日本に有る事から怪しいのよ。」

「アッ、有る！」

上条とインデックスは声をそろえて言う。

「?!！」

「確かインデックスでも、法の書は解読できなかったんだよな。つまり解読するために、一度は目を通してははずだ。それならお前の記憶のなかに法の書がそのまま保管されてる筈だ。」

そう、インデックスは完全記憶能力があるため、その記憶から引き出せばいいのだ。

だがしかし、

「ダメだツツツ！」

スタイルはそれを止めた。

「それをやれば、この子が法の書の中身を記憶してしまっ！そんな



れば、今以上に大勢の魔術師に狙われてしまうッ!。」

「?。心配してくれるの?」

「!?!?」

その言葉にステイルの心はポツキリと折れた。

「。。。。。」

「上条当麻ッ!」

「な、なんだよ。」

「今以上に強くなれ!もしの、これが守れず、彼女が倒れたら、灰も残さず君の体と魂を焼き尽くしてやるからなッッ!」

ステイルは何があってもインデックスを守ってもらつ。そうしなければ殺す。と言うのだ。

その言葉にさすがのトランスフォーマーの顔も引きつった。

「ねえ、それで法の書の解読法ってどんな物なの。」

「はい、では今からお伝えするのでございますよ。」

オルソラはインデックスの解読法を伝えた。

「もういいよ。大体全部解ったから。」

「あ、あの何が解ったのでございますか？」

「あのね、これ正しい解読法じゃないの。」

「「「「は？」「」「」」

「おいおい、どう言う事だ。」

サンダークラッカーが説明を求める。

「これはトラップとして用意された。『ダミー解答』だよ。」

「法の書の怖い所はね、解読法が百とっり以上あるの。しかも、解読法ごとに違う文章になって、その全てがダミーなんだよ。」

「つまり、法の書は誰にも読めないんじゃないじゃなくて、誰でも読めるが、誰もが間違った解読法に誘導される本って訳だ。」

サンダークラッカーが張り込み説明をした。

「そうなんだよ。」

「そ、そんな……。」

「でも、考えようには救われたかもしんねえのよ。」

「いまから本当は解読法なんて解りませんでしたあ。って言えば、連中許してくれると思うのよ。」

「無理だな。ここまで暗部を見せてしまった以上。もう彼女等は引き下がれない。」

だが、話してる間に、扉はどんどん壊れていく。

「くそ、何処か抜け道は……。」

上条が周りを見ようと振り返るとステイルに誤って激突してしまい、ステイルのルーンのカードがばら撒かれた。

それに、上条は何かにきずく。

「作戦を思いついた！」

「！。なんだ。」

ステイルがそれを聞き取ろうとする。

しかし

扉が壊された。

それにいち早くきざいたタランスフォーマーは教会の壁をキャノンで破壊する。

スタースクリームは上条とステイル、スカイワープはオルソラを建宮、サンダークラッカーは天草式数名を掴んみ、

アイアンハイドをプロールはトランスフォームして教会の外に逃げ込んだ。

「で、作戦つてのはなんなんだ。この無線を通じて、野郎共に伝える！」

スタースクリームは小型の無線機を上条に渡す。

———  
オルソラ教会。

アニエーゼは静かに時を待っていた。

そして勢い良く、扉が開かれた。

上条当麻だった。

仲間は誰ひとり居なかった。

「どう考えたって、あれだけの人数を相手にしちまいながら、自由に敷地内を移動できるとは思えないんですけどね。」

「ちつとばっかし作戦があるからな。」

「作戦？ああ、なるほど。そう言う訳なんですか。なんだ、あれだけ格好つけて登場ておきながら、仲間をお取りにしちまってここまでたどり着いたんですか。」

アニエーゼはクスツと笑った。

「オルソラ＝アクィナスは言ってましたよ。彼らは信じる事で行動する。とか」

アニエーゼはまた笑った。

「まったく笑つちまいますよね。結局貴方も、誰かを騙してお取りに使うて息をすってるんですから。」

「いや、」

「？」

「俺は信じてるよ。できればあいつ等にも信じてもらえば嬉しい。こっちの問題はこっちでかたづけられらるって。」

それを聞いてアニエーゼは眉間にシワを寄せる。

「司令塔である私を潰せば全攻撃を停止できると……。まあいい

でしょう。こつちも暇を持て余していた所です。ここは一つ、貴方の幻想を打ち砕いてウサ晴らしといきましょうか。」

「Tutto paragone. Il quinto dei  
elementi. Ordinala canna ch  
e mostra pace ed ordinala」

万物照応。 五大の元素の元の第五。 平和と秩序の象徴

『司教杖』を展開

「Prima. Segua la legge di  
io ed una croce. Due cose di ve  
rse sono connesse」

偶像の一。 神の子と十字架の法則に従い、 異  
なる物と異なる者を接続せよ

アニーゼの杖の花の部分が展開し、彼女は隣の柱を杖で叩く。

「?」

その途端、上条の頭の右方面に、物凄い衝撃が響き渡る。

「うがあッ!」

その衝撃で、上条は左に吹き飛ばされてしまう。

そして相手はさらなる攻撃を繰り出す。彼女は杖の下の部分を地面に叩きつける。

「!ッ」

上条はいち早くそれにきずき、横に避ける。

「座標攻撃・・・!? テレポート!」

そんな事を言うが、相手はさらに先手を取る。

杖をナイフで傷つけたのだ。

次の瞬間、打撃とは違う、斬撃の衝撃が放たれた。

上条はさらに避けることに成功したが、油断は一切できない状況だった。

「その杖ッ!」

「フツ。そりゃ流石にきずいちまいますか。コイツを傷つけると連動して他の物にも・・・こんな風にねえッ!」

地面を叩きつけ、その衝撃が上条の肩に、その数倍の衝撃がヒットする。

「がああッ、く、くそッ」

(あの攻撃、一体何処から・・・)

アニーゼはまた杖を叩きつける。

「ま、まですッ」

上条は横に走って避けようとしたが、

「ガハアアアッ」

ゴシヤと嫌な音を立て上条の腹部に衝撃が走る。

「フンッ」

さらに背中目掛けて衝撃が走り。

「ハッ」

また衝撃をまともに喰らう。

「ウアッ」

上条は壁に叩きつけられる。

だが彼女は容赦はなく次々と繰り出される攻撃は上条を苦しむ。

アニエーゼは地面に叩きつけその場からドンドン床が上条めがけて割れる。

上条は一時的だが、動けなくなってしまった。

そしてナイフで杖を引き裂き、その斬撃は上条の背中を傷つけた。

「うがぁッ」

「フンッ」



「ガアハアツ！」

上条は倒れこむ。

「先読みして、空間に攻撃を張っておけば、そっちが勝手に飛びこんで来てくれる。」

とアニエーゼは説明する。

「つーか、邪魔だなあ。文句を言わないで流れ作業でさっさと死んでくださいってば。」

上条は攻撃しようとする、アニエーゼは先読みし、地面に杖を叩きつけたが、

上条は、それに本能し、急停止し後ろに下がる。

それで攻撃は外れた。

「！」

「その攻撃を待ってたんだよ！」

上条は右手で、衝撃を打ち消した。

そして上条はアニエーゼの元に近づく、

アニエーゼは攻撃される前に攻撃をする。

それは上条にヒットしたが上条は耐え、拳を放つ。

アニエーゼの顔に頬にヒットし、なぎ倒される。

バタリ、とアニエーゼは倒れる。

そしてアニエーゼの頭に走馬灯が流れた。

「……………」

(まさか……戻るのが……？もう一度……あそこへ……)

(いやだ！)

「戻ってたまるかッ！」

アニエーゼは起き上がる。彼女にはそれなりの事情があった。

「絶対にツツッ！」

二人は睨みあつたが。

「うっふふふふふふ。フッフッフッフ。」

アニエーゼは笑いだす。

「？」

上条は笑いに原因が解らなかった。

「努力しようと頑張ってる最中申し訳ありませんが。もう終わったみたいですよ。」

「!!!」

上条は耳を澄ます。が、さっきまで聞こえていた外の戦いの爆音よ悲鳴などが聞こえなくなったのである。

「彼らがお取りとなって粘ってる間に、私を倒して話を収めるつもりだった様ですけど、あっさり幻想は終わっちゃったようですね。」

アニエーゼは不敵に笑う。

「ああ、そのとおりだ……。」

「……。」

「お前の幻想は終わっちゃったよ!!!」

「!?!?!?」

その瞬間上条の後の窓が吹き飛んだ。

そのドアからは、ステイル、天草式、スタースクリーム、アイアンハイド、サンダークラッカー、プロール、シカイワープとその手の上に乗っているオルソラ、

そして、ステイルのルーンで作り出されるいつもの数十倍でかい『イノケンティウス魔女狩りの王』がいた。

そして周りが炎で支配された。

「使用枚数は四千三百枚。数の上では大したことは無いが、いや・天草式つてのは馬鹿に出来ないねえ。」

「ルーンのカードの配置を使ってさらに大きな図形を描き、この教会そのものを一個の巨大な魔方陣に組み替えるなんて。」

「そこらに有るものを全て利用した『多重構成魔方陣』。こういった小細工は僕にはできないな。」

ステイルは優しく微笑む。

『ガアアアアアアアアウウウウウウッ』

イノケンティウスが咆哮が炸裂する。

「ック」

「言つたる。作戦が有るつて。こいつ等はお取りになる為に逃げ回つてたんじゃない。この為にカードを敷地内に配置してただけだ。」

「ふん。数の上では私たちが断然多いんです。まとめて潰しにかかればこんな奴……」

「……」

「何をやっちゃまってるんですかさつさと……!!!?!?」

彼女は部下に命令するが……

(こゝこいつら、揺らいでやがる……。数で押せば勝てる筈なのに……ッ)

「!?!?!」

彼女はオルソラの言葉を思い出す。

『彼らは、信じる事によって行動するので、ございますよ。』

「グッ……。面白いじゃないですか。」

そんな事を言ってるが彼女は心の中で『焦り』を感じた。

( どうする・・・何をどうすればッ。( )

( 方法はッ。タイミングはッ。武器はッ!?)

「 終わりだ。アニエーゼ・・・」

「 ツッ!」

「 てめえはもう自分で解ってたろ?! てめえの自信は『 とっくの昔』に殺されてんだよッ」

上条は走りだす、

アニエーゼは自分と上条の距離が0になった時、自分は終わりだと理解した。

一気に距離が縮んだ。

バキィっと言う轟音が鳴り、彼女は吹き飛ばされ柱に激突し、気絶した。

全てが終わった・・・。

上条は自覚したとたん意識が遠くなり、彼も気絶した。

そこに、皆が駆け寄る。

そしてスタースクリームは呆然としている、シスター達に、

「おい！テメエら見たか！お前らの頭はくたばったぜ！さっさと立ち去れ！」

スタースクリームはアニメエゼを優しく掴むと、シスター達が集まっている所にそつと置いた。

「つーわけで、天草式とスカイワープが『妙にかつていた』オルソラは、イギリス清教の傘下に入る事になった訳だ。そんで

サイバトロンは自分たちで世間に馴染むつてよ。」

「お前、まさか本当に、正義の心を持つ戦士になったんじゃないや……。」

「ち、ちげーよ！」

ここは、第十九学区のジェットロン本拠地である。

「否定するのがさらに怪しい。」

「うるせえいッ」

そんな事をやっている3人。だが

『ビーーーーーッビーーーーーッ』

突然サイレンが鳴り響く。

「な、なんだあ?!」

『データが不正にコピーされました。』

「な、なにに!」

次の瞬間、ディスク投入口から、カセットが飛び出し、そのカセットは鳥に変形した。

「い、こいつぁコンドルじゃねえか!」

サンダークラッカーが叫ぶ。

コンドル……。それはサウンドウェーブ率いるカセットローンの一員だ。



「く、落ちやがれッ！」

スタースクリーンが狙撃するがコンドルは、素早く避ける。

コンドルは外に行くと、暗い夜の中へと消えていった。

「な、なんでコンドルが……。」

スカイワープが思わず呟く。

「……サウンドウェーブの仕業かもしねえな……」

スタースクリーンはそういった

「はあ！まさか奴までこの世界に……。」

(神の野郎……これもテメエの仕業か……。」

決着と始まり（後書き）

アニメーゼ「メツチャクツチャ痛かったです。」ヒリヒリ

サンクラ「・・・確かに年下の女を2度殴るのもなあ。」ジー

スタスク「ひでえ話だな」ジー

スカワ「可哀そうに・・・。」ジー

上条「不幸だ・・・。」

音波『次回、レムナント編。』

フレンジー「俺がでるぜえ〜。」

ランブル「もちろん俺とサウンドウェーブもだ！」

音波「俺ノ報告、終ワリ。」

レムナントとカセットロン（前書き）

サンクラ「俺のヒューズに常識は通用しねえ！」

スタスク「……その役はデストロンのナンバー2の俺だろ。同じ2だし。」

スカワ「どうでもいいがこの小説はもう目茶苦茶ですぜ！」

## レムナントとカセットロン

宇宙空間

『これより、レムナントを回収する。』

『分った。すぐ回収し、戻ってこい。』

『レムナントの回収・・・何だあれは!』

『どうした?なにがあった。』

『巨大なロボットが・・・ウワツ・・・ザーーッ』

『そのコンピュータは俺が使う。人間、皆馬鹿ばかり』

『おい!どうした?!応答しろ、おい!』

1日後

風紀委員支部

「事件の概要は？」

ここでは、風紀委員である白井黒子と初春飾利が居た。

「これです。」

「うん？」

モニタの映像には、

大体180〜200cm位の青いロボットが黒い車を襲い、さらに同型の黒いロボットが車のバンパーから、何かのキャリーケースを取り出し、逃走する姿が映っていた。

「なんですか？これ？」

「えっと、私はどっかのパワードスーツだと思いますけど……。」

「多分そうでしょうね。」

「それですね、このキャリーケースは高気密性と各種宇宙対策を施された、特殊なケースなんです。」

「まさか……。宇宙に運び出すつもりだったとでも？」

「……。逆に、宇宙から持ち帰ったとか……。」

「強奪犯を確保したほうが話が早そうですね。逃走ルートは？」

「車を乗り捨てて地下街に、」

「ええ？」

「信号機のトラブルで渋滞が起きてるんです。こんな事めったにないのに……。」

「むしろ好都合ですね。」

「へ？」

「初春は逃げた犯人の追跡を！」

白井はそついうと事件現場にいった。

「し、白井さん！」

地下街付近

「おい！急げランブル！」

「ふ、フレンジー待ってくれよ！」

「御免あそばせ。」

「うわ？」

ランブルは驚いた。何故なら、いきなり人が前に現れたからだ。

「な、なんだコイツ！やっちまえ！」

二人は背中に装備してある二つのビーム砲を取り出し、乱射する。

だが白井はテレポートし、ランブルの背後に周り、キャリーケースを奪った。

「なにッ。」

さらに彼女は足元の大きな瓦礫をテレポートさせ、二人の頭上に落とす。

「コイツッ」

二人は倒れこむ。その間に彼女は手城をふたりに掛け、電柱にくくり付けた。

「く、くそおっ」

「サンドウエーブになんて言えば……。」

その時白井の携帯が鳴る。

「もしもし初春？」

『ああ、黒子？』

その声の主は初春では無く、レベル5第3位、御坂美琴であった。

「お姉様？」

『ちよつと頼みがあるんだけどさ。今何処？』

「えつと……。」

『ああ、今仕事中か……。ごめんごめん邪魔しちゃったね……。』

「いいえ？それで頼み事と言うのは？」

『あゝ部屋の抜き打ちテストがあるって後輩に聞いてさ。私の私物、隠してほしいな……。』

「お姉様もまだ外に？」

『あゝ、他の子あったってみるから。じゃあね。』ブチ

「え、お、お姉様」

電話が切れツーツーと音が鳴っている。

「キィ〜〜〜ッ お姉様が私以外の子に頼み事なんて許せませんの！  
こうなったら、レポートですぐに学生寮へ……。」

だが、その瞬間白井は、地面にバタリつと倒れてしまう……。

さっきまで自分が乗っていた、キャリアケースが消えたからであつた。

白井は訳が解らなくなった。



そして、突然鋭い痛みが彼女の右肩を襲う。

そこには、コルク抜きが突き刺さっていた。

彼女が立ち上がると、キャリアケースの上に座る女がいた。

下着の代わりに、サラシを巻いてあり、上着は普通の学生服だった。

「な、何者ですの……。」

白井は痛みをこらえながら言う。

「フッ」

その女は笑ってこたえる。

「て、テレポート……。」

「あら、もう気づき？さすがに同系統の能力者は話が早いわね。」

「私の力は座標移動<sup>ムーブポイント</sup>。貴女とは違って一々物体に触れる必要はないの。」

彼女は解りやすく説明した。

「どっ？素晴らしいでしょっ？」

「<sup>シヤッジメント</sup>風紀委員177支部の『白井黒子』さん。」

「ック」

白井は謎の女に近づくようにする。

女は座標移動を使い、さつきまで縛られていたフレンジーとランブルを白井の前に移動させた。

「甘いですわよ！」

白井はホルダーのダーツを取り出す。

だが女はニタアと笑う。

座標移動をつかい、白井のダーツを自分の目の前に、転送させる。

次の瞬間フレンジーとランブルはドシャと地面に落ちる。

「「イデッ」

「何しやがる！俺ら仲間だろうに！」

ランブルが怒る。

「あら、「ごめんなさいね。」

「いや、これで逃げれる！後は頼んだぜ！結標淡希！」

フレンジーはそう言い残すと二人は逃げて行った。

「っく、」

結標淡希と呼ばれた女は、手元にダーツを転送、後にダーツを手動で投げつける。

白井はそれを避け

「だから甘いとッ！」

だが肩に続き左の脇腹にダーツが突き刺さる。

結標が座標移動でやったものだった。

「ウグッッ」

彼女は結標の前で座り込んでしまう。

刺さった所から血が服に滲みだす。

彼女は鋭い激痛を感じ、声のロクく出ない状態だった。

「言ったでしょ、物体に手を触れる必要が無いって……。残念だわ。」

「？」

「いくら切羽詰まった状態とはいえ、私事に後輩を巻き込むような人間だとは思わなかったんだけど……。」

「御坂美琴の奴。」

「!?!」

「どうして、そこでお姉様の名前が……?」

「あら、しらなかつたの?。けど知らずに利用されてるって線はなさそうね。」

「常盤台の超電磁砲はさぞ豪傑なのだろうし。」

「都合が良いとは思わなかつた?うちの連中が渋滞に巻き込まれた事。あの常盤台のエースが何を司る超能力者が、まさか知らない訳ないでしょう?」

「……さつきから何を言ってますの……。」

「残骸<sup>レムナント</sup>……って言っても解らないわよね。……そうね。ツリーダイアグラムの残骸<sup>レムナント</sup>ツて言えば解るかしら。」

「学園都市の頭脳と言えるべきスーパーコンピューター。落ちてなお莫大な可能性が残された、その演算中枢と云えば。」

「馬鹿な。あれは今も衛星軌道に……。」

「撃墜に関するテンプ資料。レアでしょう。ツリーダイアグラムはとつくに破壊されてるのよ。」

結標は破壊されたツリーダイアグラムの写真を取り出し地面に落とす。

「だから世界中がこそってその残骸、レムナントを欲しているの。」  
結標は落ちていた写真を能力で自分の手元に移動させた。

「御坂美琴も大変ねえ。何者かがツリーダイアグラムを破壊してくれたおかげで、悪夢は終わっていたのに。」

「あれが復元されれば、また実験が繰り返される。悪あがきしたくなる気持ちも少しは解らなくはないわ。」

「実験？」

「まだ解らない？あなた本当になにも知らないのね。」

「8月21日。」

「？」

「あなたが此処までたどり着いてこれたのなら、お友達になってあげても良かったんだけどねえ。」

ジェットロン本拠地

「おい、サンドウェーブが居る証拠を、見つけたぜ。」

「何？」

「お前のヒューズは正気なのか？」

「ああ、で、これが証拠だ。」

モニタに移し出された映像、それは紛れもなくサウンドウェーブ本人だった。

「ま、マジで居たのか……。この世界に。」

「そうだ、俺の情報からすると、奴はこの街の最高コンピューターだった機械の残骸を嗅ぎまわっているらしい。」

「なんで奴がそんな事を」

サンダークラッカーが質問に、スカイワープが答える。

「あいつは、集めた情報で自分の地位を上げる事があるから、最高コンピューターとやらでさらに、自分の頭脳を磨きあげようとしてんじゃないかねえか？」

「ああ、多分それで間違いないだろう。」

スタースクリーンはモニタの映像を切り替える。

「……こいつ、人間と接触してやがる。」

映像には、サウンドウェーブが女、いや、結標淡希と接触している姿があった。

「はあ。まさかまた出撃するんじゃない。。。」

「そのとおりだ!」

「マジかよ!もう一回言うがお前のヒューズは正気なんだな!?。」

「ああ!たぶん奴の事だもう手は討つてあるだろう。奴がコンピュータを手に入れたら、それを奪うのだ!」

「。。。正義じゃなくねそんなの。。。」

「はっはっは何とでも言え!俺はもっと強くなりたいたいんだからな!」

「。。。もうやだ。休みたい。働きたくない。動きたくない。」

「サンダークラッカー!そんなだとテレビだけじゃなくてこの小説でも影が薄くなるぞ!」

「!!--!」

スタースクリーンは事実(?)を言った。

それを聞いて、スカイワープは

「もう現実とフィクションがごっちゃになってんな。」

「まあいい、出撃するぞ!」

「『』」



レムナントとカセットロン（後書き）

フレンジー「実は、作者は『アドリア海の女王編』で俺達を大活躍させる

らしい。

ランブル「ま、俺らが人間サイズだからじゃねえ。」

フレンジー「予断だが、作者は『禁書のキャラ』なら全員好きらしい。」

ランブル「女たらし?」

作者「いや！そついう意味じゃない!」

新しい物（仲間）（前書き）

スタスク「最初に言うておく、特に言う事は無い！」

スカワ「アンだろうが！」

サンクラ「この小説はめんどーな事を省いているぜ。そんだけ」

## 新しい物（仲間）

ビル――

「あなたはそのために外部の組織と……。」

ビルの一室にテーブルと椅子の下敷きになっている白井黒子と、キヤリーケースに座ってる結標淡希。

「ええ、でも外部といっても地球外だけだね。いくら価値あるレムナントを手に入れても、私一人では修復できないわ。」

「だから技術と知識、そして目的がある物が欲しかった。」

「白井さん。貴女はどんな気分がした？初めてその能力を手に入れた時。正直私は恐ろしかったわ。こんな力がこの手に有る事が何より怖かった。」

「人じゃなくても、私じゃなくてもいいのなら何故私はこんな力を持っているの、一緒にいたあの子達も、同じ悩みを抱えているのよ。」

「皆、自分の能力を呪い、答えを求め続けていた。だから、私の協力し盾となる事すら厭わなかったの。」

「貴女にだってあるでしょ。自分の能力を使って誰かを傷つけた事が。私には解る。貴女は私に似ているもの。」

「どう？白井さん。共に真実を知る気があるなら、私は喜んで貴女

を招待するわ。」

「お断りですわッ」

「ッ！」

「そんな自分によつた台詞でこの白井黒子を丸めこめるとでも思っていますの？流石は悪党、言う事が小さいですわね。」

「解らないの！？私たち、能力者なんて怪物にならなくて済んだかも知れないのよ！？」

「バカバカしい。能力なんて所詮ただの能力。使い方は自分しだい。そんな当たり前の事にもきずかないなんて馬鹿ですの貴女は！」

白井は力を振り絞り、上に乗っかっている物を気にせず立ち上がる。

「！」

結標は後に下がった。

「力が怖い？」

「……。」

「傷つけるから欲しくない？」

「……………」

「笑わせないでくださいな……………」

「力が有るか無かろうと、貴女が人を傷つける人間には変わりありませんの！」

「結局あなたの言い草は、自分は『特別』で周りには『平凡』だっていう、見下し精神丸出しの汚い逃げでしかありませんわ！」

「なッ！」

「今からその腐った根性を……………」

白井はそばにある、棒状のインテリアを掴む。

「叩き直して差し上げますわッ！」

「いや……………」

結標は白井を拒絶するが白井はじわじわと近ずいてくる。

「いやッ。来ないでッ！」

白井はインテリアを握りしめ、

「ウアアアアアアアアアアッ！」

結標に襲い掛かる。

「ひッ」

結標は恐れをなして銃を取り出し、

発砲した。

「ウッ？」

彼女は一瞬間が止まったかと思った。

ドシャッつと白井は倒れる。

「はあ、はあ、はあ」

「ウッ」

結標は突然苦しみます。

「う、うあ、ああ、うっっッ」

そして、

彼女は精神は壊れる。

その瞬間、彼女の周りで妙な光が発光しその場にある物などが瞬間移動を繰り返して飛び交う。

能力の暴走であった。

ガラスが一气割れる。

だが、その現象は次第に収まっていった。

完全に収まると、空中で飛び交っていた物がズゴォと音を立て地面に落ちる。

「・・・殺す・・・。」

彼女は呟く。

「良くも私を壊してくれたわね・・・。私はまだどうにでもなったのにッ」

彼女は銃を白井に向けるがその銃はさっきの暴走で使い物にならなくなっていた。

「?。アッハッハハッ」

狂った様な笑い声が響く。

「私の座標移動の最大重量は4520?。遠くからでもここへ叩きこめるわ!」

「貴女はもちろん、このビルだって倒壊するでしょうね!」

「あら、そのケースまだ必要でしたんですの?」

白井の声は出すのもギリギリのかすれた声だった。

結標そんな白井の腹を容赦なく蹴った。

「グフウツツツ」

「ぶち壊してあげるッ。貴女が私を壊したのだからッ、しっかりお返ししてあげるからねえッ!」

彼女は、白井の腹を数回蹴ると、能力でケースと一緒に消える。

次の瞬間、周りに壁、物、インテリアなどが崩れだす。恐らく結標の仕業だろう。

だが、壁が突然、強い光によって破壊された。

「この光はお姉様!」



「黒子!!」

御坂美琴の声があった、何時も聞いている声だった。

そして、上条当麻が、白井をキャッチし、幻想殺しで能力の発動を

打ち消した。

「こちら、A001からM000へ、符号の確認の後、状況の報告に・・・。」

結標は仲間に連絡を取ろうとしていた。

だが返答は、銃撃音と仲間のおびえる声だった。

そして帰ってきたまともな返答は・・・。

『子供を誑かして安全席から御見物とは、良い御身分じゃん!』

アンチスキル  
警備員の声だった。

結標は残る仲間、サウンドウェーブへと、連絡した。

『コチラ、サウンドウェーブ、』

「助けてちょうだい！仲間が捕まってしまったの！」

『・・・解った。今そちらに向かう。』

『っへ久しぶりだなあ情報参謀さんよお！』

『オ、才前八・・・』

ブツツと通信は途絶えた・・・。

「おいおい、なんでお前がこの世界に居る？」

『俺は、死んだ、そしたら神に生き返らせてもらったからだ。』

「は〜ん。まあいい。お前の作戦は此处で終わりだ、」

『何だと！そうはさせな・・・ウオオアッ』

サウンドウェーブはスタースクリームのナルキャノンを受け、気絶する。

幸い、スタースクリームが威力を弱めていたから、大事には至らなかった。だが威力を弱めてなかったら、彼は今頃バラバラになっていただろう。

「っへ、あっけねえぜ。メガトロンのおんなにあっけなかったら良かったのによあ。」

「まあいい、おい！スカイワープ！」

「なんだ？」

「ここから西、P-177ポイント、3キロ地点にワープして、コンピュータを回収してくれ。」

「チツなんで俺が。」

スカイワープはそう言いながらワープした。

「おい、サウンドウェーブ！」

『う、・・・グ。』

「俺に協力しろ！」

『そんな事して俺になんの得がある!』

「そうだなあ。パワーアップと、ガルバトロンの元へ戻れるって所だ。」

「!!!。本当か？」

「ああ。」

(まあ、ガルバトロンは、俺がぶっ殺すがな)

『解った……。協力しよう。』

「おいおい、オメエもヒューズはどうなってんだ。こいつメガト……じゃねえ。ガルバトロンを。」

次の瞬間スタースクリーンがサンダークラッカーの顔を掴む。

(そんな事を言ってみろ……。オレアクサムラムッコロス!!!)

(……。スマン、)

そんな中スカイワイプが戻ってきた。

「……。なん……。だと……。」

スタースクリーンは言う

なぜならスカイワープが持ってきたのは粉々になったコンピュータ。

「……誰かに破壊されたみたいだ、その証拠に、この女が……」

「

スカイワープは、破片のほかに、結標淡希までもってきた。

「……コリヤヒデエナ。」

サンダークラッカーはカタコトになってしまう。

彼女は顔面を叩かれたらしく、鼻から血が出ていた。命には別状は無かったが。

『……フレンジー、イジェークト。』

サウンドウェーブの胸からカセットロンの一員、フレンジーが飛び出す。

「あゝ久しぶりだな、チビ。」

「うるせえやい！」

スカイワープがからかう。

確かに、彼は彼らに比べれば小さいが身長が180〜200cmの為、人からすれば、成人男性を軽くこす、長身のロボットである。

「で、なにすればいいんだ？」

『この人間を病院に運んでやれ』

「ありや。思ったより軽いな。じゃ、いつてくるぜ！」

フレンジーは結標に対しそんな事を言いながら、病院に運ぶ。

(いや、逆に重いつて言ったら失礼だから！)

新しい物（仲間）（後書き）

サンクラ「なんかスタスクが『オンドウル語』使ってたぞ」

スタスク「実は作者は仮面ライダーも好きなんだ。」

スカワ「……………」

音波『内容、キャラ紹介。俺の報告、終わり』(前書き)

キャラ紹介だすよ〜)



## 音波『内容、キャラ紹介、俺の報告、終わり』

スタースクリーム

地位| ジェットロンリーダー

ビークルモード| F15イーグル

説明

神の力によって、力、体力、速度、耐久力など、全てが大幅に上がっている。

色はグレー、赤、青などである。

過去に、メガトロンを裏切り、自分がナンバー1になるうとしたが、パワーアップして復活した『ガルバトロン』に殺され現在に至る。

彼のスパーク（魂）は特別で、機体が破壊されても幽霊として、この世に滞在できる。『不死身のスパーク』と言っても過言ではない。なお、幽霊体状態では、ロボット、人間、動物、構わずにとり付き本人の意志とは関係なく操る事ができる。

自分の力、スタイルに自信があり、自分の事をハンサムと言った事のある。（ハンサムなのは事実だったりする）

武器は、相手の回路を麻痺させる『ナルビーム』だったが、今は破壊力もある『ナルキャノン』にパワーアップしている。

口の上手さを生かして、脅迫、恫喝など様々な手で、相手を丸め込む事もある。

野心家であるが現在は若干優しくなったイメージがある。

速度がずば抜けて速く、無限のスピードを誇る。普段は加減しマッハ10〜20程度で飛行している。

サンダークラッカー

地位 | ジェットロン達成員

ビークルモード | F15イーグル

説明

神に、スパークと機体をコピーされ、スタースクリームのおかげで復活をとげる。

姿はスタースクリームと同型で色は水色とグレーである。

コピー体ではあるが記憶、能力を全て受け継いだためサンダークラッカー本人であることに変わりがない。

武器は火炎放射器によるファイヤーアタックとソニックブーム。

仲間が慌てたり驚いたりしている様を指して「ヒューズがぶっ飛びそうだったってよ」や「ヒューズでも飛んだのか？」などとヒューズにからめて表現するのが癖。

卑屈で事勿れ主義な性格であるが、他のメンバーに比べれば温厚な性格であり、突飛な言動で喧嘩になった仲間をたしなめている。仲間に地味とからかわれる事がある。

スカイワープ

地位 | ジェットロン達成員

ビークルモード | F15イーグル

サンダークラッカー同様、神にスパークと機体をコピーされ、スタースクリーンのおかげで復活をとげる。

姿はスタースクリーンと同型で色は紫と黒である。

コピー体ではあるが記憶、能力を全て受け継いだためスカイワープ本人であることに変わりが無い。

2.5マイル(約4km)の範囲でワープが可能である。武器としてはサイドワインダー、及び可変口径マシンガンを装備している。愉快犯的にからかうのが好きという一面もあり、空を飛べないものや小さいものをからかうという事などもしばしば。

法の書の一件では、オルソラを一人でも助けようとする心優しき場面も。

## サウンドウェーブ

地位 | カセットロン情報参謀。

## ビークルモード | ラジカセ

ブロードキャストと相打ちになり戦死したが、神が機体とスパークをコピーし現在に至る。

コピー体ではあるが記憶、能力を全て受け継いだためサウンドウェーブ本人であることに変わりが無い。

その諜報能力を駆使して常に仲間の弱味を握る陰険さを持っている。体の大きさを変えて日用品として人間社会に潜入したり、他者の心を読むマインドスキヤンなどの能力も秘めている。

声にエフェクトが掛かっている。

常に無感情で、顔の表情も伺えず冷静沈着な行動を取っている。

音波を使った攻撃や工作活動を得意とし、そして胸のケースにカセットテープから変形する小型ロボットの部下カセットロンを収納している。

カセットロンを出撃させる時の掛け声は「イジェクト」、胸部に収容する時は「リターン」。

武器は「振動ブラスタガン」と右肩の「エレクトリックランチャー」。

## カセットロン

カセットテープをモチーフにしたデストロンの諜報部隊。メンバー全員がカセットテープに変形する。

ラジカセをモチーフにしたサウンドウェーブがリーダーであるが、彼自身はカセットロンではない。

## フレンジー

地位 | 特殊破壊兵

ビークルモード | カセットテープ

## 説明

生意気で騒々しい性格。

色は青。

武器は背部に装備しているマシンガンで、手に装着して使用する。両腕をハンマーアームに変化させ、地震を起こす事ができる。これに加え、200dBの大音響による神経系への攻撃能力も持つ。サウンドウェーブに収納される事が少なく、普段から外にいる事が多い。

## ランブル

地位 | 特殊破壊兵

ビークルモード | カセットテープ

説明

フレンジーと同型で色は赤。

フレンジー同様にハンマーアームに変化させる事が可能。喧嘩っ早い性格。

## コンドル

地位 | 空中攻撃兵

ビークルモード | カセットテープ

説明

カセットから、コンドルにトランスフォームする。

偵察・攻撃・奇襲をこなせる万能さに、小型にも関わらずかなり優秀、  
そして、スタースクリームを軽々と持ち運ぶ程のパワーを持つ有能な兵士である。  
無敵に近い強さは、大抵の攻撃を卓越した機動性で回避するという戦術と退き際を誤らない危機察知能力によるものであり、  
コンドルの素早い動きにも対応できる敵に対しては意外と弱い。

## ジャガー

地位―情報破壊兵

## ビークルモード―カセットテープ

カセットテープからジャガーに変型。主に追跡やスパイ活動が任務。両脇に陽子爆弾を装備している。

## バズソー

地位―空中攻撃兵

説明

コンドルと同型のカセットロン。コンドルとの違いはコンドルのボディが赤いのに対し、バズソーのボディは黄色である。コンドル一体では任務が完遂できない時に出撃する。

こつから先はオリジナル設定だア！

トランスフォーマーの秘密。

彼らは宇宙の機械生命体、いわゆるエイリアンである。

なので放射能を発している。彼らの放射能はアレイスターの『<sup>アンダー</sup>滞空  
<sup>ライン</sup>回線』を一時的に狂わせている。

それでアレイスターの監視網を逃れている。

機械の生命体の為、読心能力や精神感應能力、念話能力の心を読む能力やテレパシーなど効果が一切無い。

ジェットロン基地

武器室、リペア室、エネルギー補給室、牢獄室、会議室、休憩室、  
トレーニングルーム、  
など、である。

そして、この世界の全てを記憶する、コンピュータがある。

パワーアップポイント

パワーアップポイントとは、スタスク達が『正義っぽい事』をする事によって溜まる。

これを貯める事で元の世界に戻った時、さらにパワーアップする事が出来る、と神は言っているが、定かでは無い。

ポイントは貯めれる他、『悪っぽい事』をすると、減るらしい

オマケ

スタスク「サウンドウェーブ！ラジカセにトランスフォームだ！」

音波 『ミュージック、スタート』

スタスク「stsk visions を歌うぜ

これ以上遠くまで飛べない機械がいた

傷もない立派な羽で 青空をなじった

【コノ組織モ悪クナイ アノ宇宙ハ高クナイ コノ組織モ良クハナイ】



体で感じる速度を恐れてる

誰にでも力は持てる・・・ニューリーダーになれない

【本当八飛ビ立テナイ 本当八飛ビ立チタイ】

今叶えたい願いの向こうで輝く 俺は強い

瞳に映す

「未来に立って、いつも強くて」そんな奴は俺さ

俺はナンバー2でも 強い気持ちでこの手伸ばして

いつか掴む現実の俺は ニューリーダー」

スカワ 「改造するなよ！」

サンクラ「ヒューズがぶっ飛んでんじゃねえのかい？」

スタスク「俺にピッタリじゃ〜ん。」

サンクラ「一体何処にそんな要素がある?!」

オマケ  
—  
完

音波『内容、キャラ紹介、俺の報告、終わり』(後書き)

色々反省はしてるだす。

## 他の世界のスタースクリーム（前書き）

スタスク「ふあゝ作者の文章見ると眠くなるぜ」

サンクラ「まあ、初心者なんかこんなもんだろ。」

スカワ「ってか作者さあ。俺らの名前省略すんのやめてくれんかね」

## 他の世界のスタースクリーム

『フレンジー、何をそんなにテレビを見つめている。』

サウンドウエーブは疑問に思い聞く。

「いやあ、ただ外が祭り騒ぎだし気になったんだ」

サンダークラッカーは驚愕する。

「はあ?!お前が人間の祭りに興味を持つとは……。」

サンダークラッカーは頭を片手で押えながら言う。

「おいおい、何だ外に行きたいのか?」

スタースクリームは呆れ気味で話を切り出す。

「まあね。」

「じゃあ、外に行つていいぜ。つか、勝手に外言つてもいいんだが。」

スタースクリームが手でシッシツとやりながら呟いた。

「マジで?」

「ああ、それとついでに俺も用事があるから一緒に来てもらおうぞ。」

「なんか用事でもあんのか。」

スカイワープが問う。

「まあな、あとサウンドウェーブ。」

『ああ、図ってる』

「ああ、それが済んだら連絡をくれ。」

スタースクリームとサウンドウェーブ以外、皆首をかしげた。

学園都市 ビルの屋上

ここは、何も変哲も無い屋上……。のほろほろだが見るからに怪しい影が二つあった

「いいぜ、このイケメン、スタースクリーム様に任せろ！」

一人はロボットであった。

スタースクリームと名乗ったが『スタースクリーム』とは違う形であった。

顎が長く、指先が尖っており、股から膝が細い。

デザインが似ているが体系が全く違う。

「凄い自信ね。流石はエイリアンと言った物かしら。お姉さんちよつと貴方に興味があるわ。」

そしてもう一人。

色の強い細かく手入れの行き届いた髪と青い瞳も持っており、スタイルが無駄にと言っていいほど良い美女であった

なにかしら、目に見えない色気が漂っている。

「いや、俺の方が年上なんだが……。まあいいかトランスフォーム！」

彼が無駄にカッコ良く、『前進翼ジェット戦闘機』にトランスフォームする。

小声で「キマリすぎだ」と言ったが女には聞こえて無かったようだ。

「イケメン、飛び去るッ！」

と、意味不明な掛け声と共に凄い勢いで飛び去った。

その頃――

スタースクリームとフレンジーは上空から『大覇星祭』初日の様子を見ていた。

スタースクリームとフレンジーはどちらも 飛行能力を有している。と言っかデストロンは皆有している。

「何か、人間って愉快な生き物だなあ」

「そうか？かこの街では 争い事かなりが多いんだぜ？」

「スタースクリーム。ちょっと俺も混ざりたいんだが。」

「やめておけ。つーかやめてくれ！」

「ちえッ」

「……あ？ありや確か……。」

陸の競技場に居る 人間の中には 上条当麻いた。



「あいつの参加してんだな……。」

「おい、なんだありゃ」

「ああ、ありゃ、能力だな。つか競技で使っているのかよ……。」

そんな観賞時間が続いたが。

『スタースクリーン』

サウンドウェーブからの通信が届く。

「おう、なんかあったのかあサウンドウェーブ。」

『トランスフォーマー反応、発見。場所、第七学区、P|342地点。』

俺の報告、終わり。』

「おい、フレンジー！観賞は終わりだ！任務を手伝ってもらおうぞ。」

「もう終わりかよ。」

「トランスフォーム」

フレンジーがコックピットに乗る。

強大なエンジン音が鳴り響き、一気に噴出する。

戦闘機とも思えないスピードP|342地点に向かう。

「ウオッ」

物凄いスピードにフレンジーは驚愕するが、わずか5秒程度で目的地に着いた。

そこに、何者かが居る。上空で何かを待っている様だった。

そいつの姿はまさに『顎が長くちよつとスマート』なスタースクリーム。

「てっ、もつ来やがったのかよ！」

「おいおい、ちよつと待て。何？お前。まるで顎長の俺じゃねえかよお！顎長スクリームってか？」

それを聞き、顎長スクリーム（スタスク曰く）はニッヒツヒを笑う。

「そう、俺様こそイケメン、『スタースクリーム』だ！！」

それを聞きスタースクリームはスタースクリームに激怒する。

「んだと！スタースクリームは俺様だ！第一、俺と同じ名前のくせ

に その顎は何だ！

「スタースクリーム様の名を汚すんじゃないねえ！」

「なにを〜ッ俺こそイケメンだ！皆大好きイケメンスタースクリームだ！」

「イケメンイケメン言ってるがな！俺にとっちゃイケメンじゃねえし、同じ名前として『シヨック』なんだよ！」

「シヨクシヨクシヨ〜ック！」

そう言い、スタースクリームはナルキャノンを放つ。

閃光は顎長スクリーム（スタスク曰く）を捕らえ、腹部にあたる部分を破壊する。

「イケメン台無しイイイイイイイイイッッッ」

顎長スクリームは空中分解する、――がしかし

撃たれ破壊された筈の部品 が元の位置へを戻り 彼は再生する。

「イケメン、ふっかつつ!!」

「アイツ・・・まさか自己再生機能が有るのかッ!」

「なあ、スタースクリーム。再生するなら動かないよう、電子手城  
付ければいいんじゃないね?」

「お前、天才だな!」

そして、スタースクリームは電子手城を探すが

「.....」

「どうした?」

「電子手城、戻らんと無い。」

「この馬鹿ナルシスト!!!」

「うるせえッでも此処は退却する——」

「ありや、逃げやがった？まあ、良いや。仕事仕事と」

Aスタースクリームは空中でまた何かを待つ。

「イ〜ケ〜メンの旅〜、世界の巡って〜ローマ正教へ〜」

意味不明な歌を歌いながら。

「イツケメンはローマ正教にきょ〜りよ〜」

「・・・お、居たぜ居たぜ。」

Aスタースクリームが見つけた者は、ツンツン頭の少年、金髪でサングラスを掛けた少年、赤毛で長身の神父の三人だ。

「居たぜ居たぜ居たぜアイツ等をジャマすれば良いんだなツッ」

そして、Aスタースクリームは両腕のキャノンを構える。

「イケメンビィ〜ム」

変な掛け声と共に、両腕の銃器がうなりをを上げる。

「ノワツッ」

「な、コイツは——ッ」

赤毛の神父——スタイルが絶句する。

「お前は……確か……」

ツンツン頭——上条はこう言うロボットに見覚えがある。

「……コイツが噂のロボットですかいかい？かみゃん。」

「イケメン、現る現る。悪いが、お前達にはくたばってもらっぜ！」

Aスタースクリーンは通称『イケメンビーム』を構える。

「ちょっと待て、なんで俺達の邪魔すんだ！」

上条は問う。

「はあ？そりゃ俺がローマ正教に雇われたからに決まってんだろ。」

「ッッ」



Aスタースクリームはビーム砲に全神経を集中させる。

そして撃つ準備は整った――

「じゃ、サイナラッツッ！」

狙われた三人は逃げようと思ったが、それで逃げ切れるとは思わなかった。

ステイルは、相手のビームに、炎をぶつけて自分等の被害を防ごうと思った。

上条は、ビームが異能力か解らないが一か八かで 右手で防ごうと思った。

土御門は自分の肉体の破壊を厭わず魔術を使おうと思った。

だが、そんな事をする前に形勢逆転の奇跡ミラクルが起こる。

「ナル光線キャノンツ」

突然、巨大な二つの閃光がAスタースクリームを直撃する。

それを喰らったAスタースクリームは、下半身が碎け散る。

「イ、イケメンバツラバラアアアッ」

その閃光を放った者は空中に居た。

それは赤と白のロボット。

まさに、G1スタースクリームとほぼ酷似している姿だった。

「お前等、先に行け。」

まさにヒーローの様な台詞を吐く。

「あ、ああ、サンキューな！」

三人は走り去っていく。

そしてAスタースクリームはまるで、ビデオを逆再生する様に、離れて行った部品が元の位置へと戻っていく。

「ゲツまたトランスフォーマーかよッ。しかも俺と若干声似てるし！」

「お前の相手はこの私だ。」

突然現れたスタースクリーム——Mスタースクリームは左の羽を『ウイングブレード』に変え右手で握る。

その姿は——武士の様だった。

「チッ、誰だか知らねえが、俺の邪魔すんなッ」

如何にも

負けフラグが建ちそうな台詞を言うAスタースクリーム

「イケメンビームッ」

Aスタースクリームが放った閃光はMスタースクリームのウイング  
ブレードで薙ぎ払われる。

「ハアアアアアアッ」

---



他の世界のスタースクリーム（後書き）

A スタスク 「イケメン、現る現るッ」

M スタスク 「私は闘う事にした。私の信念の下でな」

スタスク 「なにこの存在の差は・・・」

無の表情の中に——（前書き）

音波 『今回は俺の『心の中』が描かれていル』

スタスク「サウンドウェーブくううん出番をかつさらってんじゃねえよ」

無の表情の中に――

サウンドウェーブは馬鹿騒ぎしているスカイワープ達を見てただジツと佇んでいる。

彼は無感情な表情――もっともマスクとバイザーで表情は読めないが複雑な気持ちと気持ちが交差していた。

彼はこの世界に飛ばされ、最初は自分の能力を高める為、レムナント『残骸』を回収しようとした。

だがそれはスタースクリーム率いる『ジェットロン』に妨害され失敗に終わった。

そして――

「俺様に協力しろ」――スタースクリームはそう言った。

そして協力すれば いずれガルバトロンに会える――と言う条件で協力している。

だが今の彼等――『ジェットロン』には『デストロン』の面影は無かった。

『デストロン』は悪の軍団だ。

そして『ジェットロン』も元々はデストロンだった。



昔の彼等に正義の為に戦う理由は無かっただろう。

だが――今の彼等は違った。

理由はイマイチ解らないが、『正義の行い』を彼等はやっていた。

それは全て、スタースクリームの思惑だった。

スタースクリームは、頭が良く実力ある厄介者である事は昔と変わらない。

昔 彼は上司である『ガルバトロン』 及んでメガトロン』を蹴落とし、自分がデストロンのニューリーダーになろうとし、

裏切りを繰り返していた。だが何時も何時も失敗し、メガトロンに命乞いをするのが当たり前だった。

だが人は力を手にすると変わってしまう物だ。

彼はこの世界でパワーアップした。昔と比べ物にならない程に

そして彼は悪党どころか正義の行いに等しい事をやっている。

今の彼ははつきり言えばリーダーに相応しい人材だ。

それが皆に伝染したのか、他のメンバーまで性格以外、ほとんど変わってしまったている。

自分はどうかだろう？

正直言えば、ガルバトロンに協力していた時期より身が軽い。

何故だろう？自分がもっとも尊敬している人のそばに居た方が重苦しかった。

自分が一度ガルバトロン 及びメガトロンを一度見捨てたから  
—— 違う。

死んだ仲間 —— スタースクリームに会えたから —— 絶対違う  
断じて違う。

何故だろうか —— 今の彼には何もかも、周りの事より自分の事が  
もっとも解らない。

そして『正義』と言うキーワードが頭から離れない。

今まで全然縁のない言葉が頭から離れるどころか『意識』してしまっている。

そして自分の『目標』をも理解できなくなった。

何故自分は最初『デストロン』に所属し悪の限りを尽くしたのか？

何故自分は悪党だったかが解らない。

本能か——それともガルバトロンにただ使えていただけか。

今の自分は——何なのか。

それが解らない。だから今現在、スタースクリームに協力している。

答えが導くその日まで——彼は迷い、行動する——

「おい、何黙ってたんだ？ヒューズが飛んじまったのかい？」

『いや、考え事ヲしていただけダ』

その時サンダークラッカーは、サウンドウェーブから今まで彼からは感じられなかった感情を感じ取った。

それは何気ない言葉だが『重い』なにかがあった。

サンダークラッカーは不信感を覚えた。

「変な奴だな」

その時、休憩室のモニターが起動する。

『おい、聞こえてっか？』

モニタには、スタースクリーンが映っていた。

『急だがよ。こっちに来てもらっせ。』

『……………戦いか?』

『ああ。』

「俺のヒューズの事も考えてくれや……………」

「まったくだ……………」

サンダークラッカーとスカイワープは嫌そうな顔をしながらも、戦いの準備に移った。

無の表情の中に——（後書き）

音波 （本当にコイツは変わった……。）

サンクラ「おお〜いスタースクリーム。ちょっとプレス機に入ってくれ調子が悪いんだ。直してくれ」

スカワ「うん。入った隙に『スイッチオン』とかしねえからよ（棒読み）

スタスク「サンドイッチにされて たまるかってんだッ！」（逃走）

音波「……そうでもないかも……」

レーザーウェーブの反乱した世界で (前書き)

スタスク「あのさ、『違う世界』でレーザーウェーブが反乱を起こしたらしいぜ。」

スカワ「違う世界？」

スタスク「ああ、P S 2のゲームの中で。」

スカワ「おいおい、現実とフィクションがゴツチャになってんぞ？！」

スタスク「細かい事は気にスナ〜ル」

サンクラ「言ってる事も ギャグも ヒューズも ぶっ飛んでやがる……」



レーザーウェーブの反乱した世界で

とある世界――

ここは真つ暗な宇宙。

星と星が輝き、綺麗な風景がそこには有った。

宇宙の中で飛行している3つの影があった。

いや、正確には4つだ。

「急げ！早くしないと奴が来るッ！」

尖がった頭で白色のロボットが叫ぶ。

「チッもつあんな近くにッ」

「俺等、本当に逃げ切れるのか?!」

同じく赤いとんがり頭のロボットで赤、白の二人が低い声で言う。

そして3人に接近する影が有った。

それは、全身紫一色で右手にはビーム砲を装備している。

そして彼の黄色く発光する一つの単眼は3人と捕らえていた。

彼はビーム砲を3人に向ける。

瞬間、巨大で壮絶な紅い閃光が一直線に3人に接近する。

「よ、避けるッ」

3人は何とか逃げ切るが、

突然、その閃光が『空間その物』を切断する。

そして空間の亀裂は3人を吸い込む。

「なッ」

3人は抵抗するがジワジワと彼らは亀裂に近づいていた。

そしてついに、彼らは亀裂に吸い込まれてしまった。

「ぐ、あああああああああああ」

レーザーウェーブの反乱した世界で（後書き）

スタスク「説明しよう。この世界はレーザーウェーブが『ゼルク  
オーツ』を手に入れ暴走してしまった世界なのだ。この世界の彼は  
敵味方構わず

破壊を尽くしているのだあゝ」

音波 「何言ってるんだ？」

スタスク「いや、俺にもさっぱり。なにかに取り付かれた様な感じ  
が・・・」

新ジェットロン（イカトンボ）（前書き）

スカワ サンクラ「ちょっと待て」

スタスク「何だ？」

サンクラ「いや、イカトンボって、」

スカワ「あのイカトンボ共か？」

スタスク「さあ？でも俺たちの出番は減る可能性が有るな。後で潰しとこ〜」

## 新ジェットロン（イカトンボ）

イギリス 聖ジョージ大聖堂

薄暗い部屋の中ではステンドグラスが美しく輝いている。

もともと日本とイギリスでは約9時間も差がある為、イギリスは今夜なのだ

そんな芸術的な風景の中、二人の人間がいた。

一人は――青い瞳で 髪が身長の2・5倍ありその髪を後ろで留めているおり修道服を来ている。

見た目18歳位の美少女だ。

そしてもう一人は中年で、サラリーマンの様な服を着ている。そして何か巨大な剣を布を使って両手で支えていた。

修道女――いや、必要悪の教会のトップである実力者、アイクヒョッフ最大主教  
ローラースチュアートは

手にあるメモ帳の様な物を読み上げる。

「スタッフノート 刺突抗剣のオリジナルは存在せず、人々の勝手な憶測が伝承に残りてしまったと……。」

「ほう、此処に書かれし事は、真実かしら？チャールズ「コンダー」  
ローラは男に問いかけた。

「申し訳ありません。我が大英博物館でも今日の今日まで全くきずかず……。」

どうやら彼は博物館の関係者らしい。

「では、それは一体なんなりと言つもの？」

「はい、『雪だるま式』と伝承が交差している為 はっきりとした  
確証は無いのですが……。」

「これは剣ではありません」

「なに……」

「現地では、クローチエディビエトロ使徒十字。  
現地では、ペテロの十字架と言われていた物品の様です。」

それを聞きローラは驚き、イスから勢い良く立ちあがった。

「ペテロの十字架だとッ！」

彼女はキツイ表情になる。

「なれば、奴らの交わした取引の意味が、根本より異なりてくる。」



そして、彼女は考えた。

現状の『深刻』さを推測するために。

（取引の終了と共に、学園都市は崩壊せしめる。いいや、『それ以上の事』が起こりけるわよ）

彼女はさらに険しい表情になる。

「チャールズ＝コンダー、もう戻ってよろしいわよ。」

「はい。」

彼はスタスタと大聖堂から出て行った。

その後ローラは小型の無線機を取りだした。サイズは携帯より小さめだ。

そして無線からから声が聞こえた。

『どうした？ なにか緊急事態かい？』

「ええ、今から学園都市へ向かいてちょうだい。現状のデータは今から送りけるのよ。」

『ハイ』

その瞬間、大聖堂の近くにある工場の様な施設から何かが飛び立った。

それは赤、青、白の三機の戦闘機だった。

そのエンジン音は静かな夜の音に溶け込む事は無く、その音だけが夜のイギリスに響き渡った。

それを最大主教は大聖堂の中から見つめ呟いた。

「貴方達の実力、期待してるわよ・・・」

「ついに、最大主教はあのイカトンボ共を出勤させたか……」

ステイル「マグヌスは公園のベンチで待機していた、来たるべき時の為の休憩をしているのだ。」

そして携帯片手に誰かと話している。

『だあれがイカトンボだコルアツ！』

イカトンボと呼ばれた人物が携帯越しに叫んでいる。

「で、状況は解っているね？」

「ああ、わかってる。」

さっきとは違う人物が電話にでる。

さっきとは違いクールな感じだ。

「さ、てと。じゃあ切るよ。」

「あ、切りやがった。散々イカトンボ言いやがってッ」

此処は広い学園都市の工場の中だ。

そこには、赤、青、白のトンがり頭の巨大なロボットが居た。

そして背中には戦闘機の羽の様な物ある。

はっきり言えば『胴体』はスタースクリームそっくりだ。

「まあいいじゃねえか。今は仕事に専念しようぜ。最大主教からエネルギーを貰うためにな。」

白いロボット——ラムジェットは静かに言った。

「……………まあ、それもそうだな。」

赤いロボット——ダージは険しい顔で何とか納得する。

「さあ、さっさと終わらせるぞ。まあ、俺一人でも敵共を全員蹴散らせるがな。」

それを聞き、ラムジェットは首だけ捻り、スラストに言い放つ。

「やけに威勢がいいじゃないか、戦いの時、その半分も勇気があったらな」

スラストはムツとする。

「チツ、黙れよ。お前だつて昔は何時も何時もやられてばかり。及んでお前は『やられ役』だ！」







そしてダージは頭の中でこう思った。

(こいつ等が馬鹿で良かった……。)

そうダージはこの三人の中で一番知力が高いのだ。

「さて、じゃあ電話するか」

「誰に？」

ダージの言葉にスラストは疑問を抱いた。

「誰について、お前そりゃアッチで この件の事を詳しく調べてる奴等にしろつが……。」

「そうだったか……。」

「いや……まあいいや。早速連絡をしよう。」

ダージの合図と共に3人は腕のから無線を展開させる。

無線——と言っても小型マイクのような物だ。

「おい、俺だダージだ。」

『もしもし——ってオルソラッ！テメエ図書館の中でマフィンなんか食うなっつただろ！』

「」「」「……」「」

「もしもし。」

ラムジェットは焦りながら言う。

だがその声はあっちには聞こえていない。

そしてさっきとは違う柔らかい声が無線から聞こえてきた。

『しかし、こちらは天草式の皆さまにお作りいただいた、』

『ボロボロ溢すんじゃないわよッ!』

「おっ、いきこえておりますか。」

スラストは微妙に柔らかく言った。

それを聞き他の二人は『キモッ』と思ったただけなのだが

『あ？ああ、イカトンボ共か……。』

「『イカトンボ言っなッ』」

三人の声がハモツた。

「『つたく、で調子はどつだ。』」

『あたしは本来、暗号解読専門官なんだ。大量の情報を扱うのは、お手の物よ。』

『シェリーさん。私わたくしだって暗号解読は得意なのでござりますよ』

『とにかく、報告書のデータは後で——あ？・・・ってこの馬鹿溢すんじゃないかね。うつつただろオオオオオッッ』(ブチブチブチ)

新ジェットロン（イカトンボ）（後書き）

スラスト「やっと俺たちの時代がきたッ。いや時代が俺たちに追い付いたんだ！」

ダージ「よし、俺たちに立ちはだかる奴ア皆殺しにしてやるぜッ  
ッ！」

ラムジェット「……………（なんて言えば良いのか解らん）」

戦いの前に（前書き）

イケメン「やあ！俺様はディセプティコンのイケメン、スタースク  
リームだあ！」

スタスク「イケメン。そしてこの顔である。・・・ブツ」フキダシタ

イケメン「イラ」

スタスク「魔法の言葉で楽し〜仲間が、ポポポポ〜ン」

イケメン「スピードが命なんだよ。」

スタスク「あれ？お前イケメ『ソ』になってんぞ。」

イケメン「ああ！マジだあ！ザケンナ！」イケメンビーム

作者 「イダダダアダダダアツツ！」



## 戦いの前に

学園都市、第七学区地上

ここではイカトンボこと（本人達は否定している）

スラスト、ダージ、ラムジェットがロボットモードで飛行していた。

そして3人は右腕の無線機能を作動させている。

「もしもし、何か解ったか？」

そして無線からは柔らかく優しい女性の声が聞こえてきた。

『はい、——え〜と、イカトンボさんでよろしいのでございませうか？』

「ダージですッッ！」

怒り40%、呆れ60%で答えた。

『それは失礼したのでございます。では、今から説明するのでございますよ。』

「ああ、急いでくれ。」

『はい。』  
『クロトチェディビエトロ使徒十字』は星座の力を利用する大規模霊装なのだから。』

「どう言う事だ？」

スラストには全く訳が解らなかった。

「お前は馬鹿か……。要するに、相手は星を使ってこの街を支配しようって訳だ。」

ラムジェットが呆れ気味に言う。

「ふ、ふん」

ダージはスラストに　コイツ本当に理解してんのか？と思いながら話を続けた。

彼はさつさと仕事を終わらせ『ご褒美』を貰いたいらしい。

「で、後は？」

『はい、』クローチエディビエトロ使徒十字』は星座が良く見える場所、及んで広くて空を見渡せる場所で行えるのが条件なのでございます。』

星、と聞いてスラストは自分の故郷を思い出す。懐かしき記憶だ。

「星ねえ。センバートロン星もその中にあるのか。」

『せいばーとろん星？』

「ああ、俺達の故郷の星だ。俺たちは宇宙から来たんだ。」

『あらあら、そうでございましたか。では貴方は『スタースクリーム』さん達と一緒になのでございますね。』

その時、懐かしく、二度と聞きたく無かったキーワードを聞き三人はピクツと固まる。

「スタースクリーム？なんでお前が知っている？」

さっきまであまり喋らなかったラムジェットまでも動揺している。

スタースクリーム。デストロンナンバー2で、野心家。そしていつもメガトロンに怒られているニューリーダー（笑い）の事だった。

「スタースクリームさんだけじゃ無く、スカイワープさんやサンダークラッカーさん。あ、あとアイアンハイドさん、プロールさんなどにもお世話になりましたのでございますよ。私を助けてくれたロボットの一人ですし」

スカイワープとサンダークラッカー。デストロン航空兵の同僚の事。アイアンハイド。サイバトロンの警備員でちょっと血の気の多い宿敵だ。

プロール。サイバトロンのメンバーで、頭のキレる敵。

「……………わ、解った。切るぞ。」

三人は急いで腕の無線機能をしまう。

「スタースクリームが……………この世界に居やがるなんて……………」

「

ダージが震えた声で呟く。両手を頭に抑えている

「うん、怖い。アノ、オロカモノ。」

スラストは言語機能まで硬直したのか変な喋り方だった。しかも無表情

「まあ、どの道今から出撃すんだ。スタースクリームには合わないだろうから、安心しろよ。」

ラムジェットが切り出す。

そして二人考えたが結局は頷く。

「そうだったな、行こうか。敵をぶっ潰しに。」

スラストが言う。

「トランスフォーム」

そして3機の戦闘機は敵地へ飛び立つ。

此処は電車の中だ。

電車は今二三学区へと向かっている。そして目標もそこへと向かっている。

いわば戦場へ向かう様な物で。

「あゝかみちゃん。言い忘れてたんだが……」

上条当麻は土御門元春の言葉に反応する。

なにせ今は急いでいる、しかも敵は手ごわい。しかも巨大な顎長口ポットまでいる。

今はどんな可能性にでも縋りたい状態だ。

「実はこっちの『上』が助っ人を送ってくれたんだぜえ。」

嬉しいニュースだった。そして助っ人がどんな奴かが一番気になる。

「助っ人？どんな奴なんだ？」

だがステイルの返答はあまりインパクトが欠けていた



「3馬鹿イカトンボだ」

一瞬、上条にとって空気が凍りつく。

数秒間、沈黙が続いた。

「いか・・・トンボ？」

「正確には、頭が尖っていて、空を飛べるロボットだ。」

（ま、まさかあの何とかスクリームの仲間じゃ無いだろうな・・・）

「まあ、少しは有利になると思うんだがね。」

「「そのまま殺られるイケメンじゃねえぞ」

Aスタースクリーンはとある工場に居た。

どうやら工場を襲ったらしい。近くには襲撃を受け、気絶し倒れている人間がいた。

そして彼は工場の機械やコンピュータを改造している。

いや、改造と言うより 鉄クズから兵器に変換している方に近い。

彼が機械に青い炎の様な物を触れさせた瞬間、それは人型の巨大ロボットに変わってゆく。

そのロボットの姿はまさに『黒いAスタースクリーン』だ。

そしてその数はすでに50は超えている。

これは悪魔でたやすく作れるクローン。機械さえ有れば『いつでも』早く』作れるのだから。

「これ位で良いだろう。さあ、イケメンパラダイスだああああッ」

彼の叫びと共に、兵士共の眼に光が灯される。

その眼は紅く発光し、強い光を放っていた。

そして兵士共はマリオネットの様にモゾモゾ動き初め立ち上がる。

そして工場の外から、魔術師——オリアナ・トムソンが入ってきた。  
。

彼の叫びが気になり入ってきたのだ。

「あら、何かしら自称イケメンちゃんがこんなたくさん、」

A スタースクリームはムツとする。

「自称じゃねえ！列記としたイケメンだ！」

「まあ、どちらにせよお姉さんの好みでは無いわ〜」

「……お前ってスリップストリームに似ているな……。」

かつての仲間（すぐ裏切られた）を思い出しながら A スタースク  
リームは憂鬱になった。

仲間に裏切られた無念と、イケメンを否定された悔しさが一気にこ  
み上げてきたからだ。

「はあ。ローマ正教ってはっきり言えば酷い集団じゃねえか。裏で  
邪魔な奴殺したり。」

なんか、綺麗事並べてヒデエ事する集団にしか思えねえな。まあ、  
俺も人の事言えないけど。」

何気にそんな事を言う。単なる思い付きだった。

「……でもお姉さんは……皆が幸せになるなら悪魔にでも従う  
わ」

彼女は何時もの色気が入った声ではなく、真面目な声で言う。

表情も引き締まっていた。

もうすでに覚悟は決まっている——と。

A スタースクリームは機械の瞳を少し大きく見開く。

適当な質問だったのに、結構真面目に答えたのが意外だったらしい。

「お前の覚悟も半端じゃ無いみたいだな。イケメンビクリッ」

「そう……私はそんな半端な気持ちでこんな事しないわ。」

「……そうですか、ああそうですか。じゃあ、さっさと決着をつけるとするか。俺も早く帰って褒美を貰いたいからな。」

「だうやら彼は『褒美』と言う条件でローマ正教に協力しているらしい。」

しかし彼は特にローマ正教に慕っている訳では無さそうだ。あえて言えば、『利用するだけ利用してポイツと捨てる』それが彼のやり方だ。

そしてそれが彼の流儀だ。

「そうね、そろそろ此処で落としてしましましょう。今まで何も知らなかった光の乙女を 泥の中に突き飛ばす様にね」

だな。とAスタースクリーンは呟く。

そして彼が右手をうえに上げると、

「よおしッ！イケメンズよ！出撃準備だ、さっさと取りかかれ！」

「yes。starscream」

数十人の中の一人が言う。

そして彼はクローンの中で唯一目つきが悪い。おまけに頭に一本角を付けている。

まるでどっかの赤い 星さんだ

彼の名は『ドレットストーム』

Aスタースクリームが自分のクローンを指揮する存在として作り上げた個体だ。

兵士等はそれぞれジェット機にトランスフォームする。

そしてそのクローンのオリジナルであり、リーダーのAスタースクリームは、パチン、指を鳴らす。

その瞬間 ドレットストーム除く クローン達はゴウツと エンジンを呻らせる。

彼等は機体を真上に向け、工場の屋根ごと突き破る。そして何処かに飛び立っていった。

「では、俺達も行きましょう。」



ドレットストームは目つきに似合わない柔らかい声を発した。

如何にも三枚目と言った感じた。性格は違えど、『三枚目』はしっかり受け継いでいる様だ。

「イケメン、トランスフォーム」

「トランスフォーム。」

ドレットストームは普通に変形するが、Aスタースクリームは物凄く格好つけて変形する。

変形した後 キマリすぎだ と呟くが誰にも聞こえない。

「よいしょっど。」

オリアナがAスタースクリームのコックピット部分に乗りこむ。



戦いの前に（後書き）

サンクラ「ACのCMばつかな。もう飽きたぜ……。」

スタスク「ポポポポ〜ン！」

スカワ「ついに洗脳されたか！」

スタスク「いや、冗談なんだけど……。」

音波「サウンドウェーブ頭良い。地球人皆、馬鹿ばかり。だからこんな同じCMしかやらないのだ。」

こんにちワン「なんだと？もういっぺん言ってみろ！」

おはよう詐欺「テメエみてえなゴマすり野郎に誰が従つか！」

フレンジ「サンドウェーブの悪口を言う奴は俺たちが相手だ！」

ランブル「ああかかってきなポンコツのサビ野郎！」

スタスク「どうしてこうなった……。」

サンクラ「つーかうサギがう詐欺になってるんだが……。」

スカワ 「カオスツ」

イカトロボの戦い（前書き）

スタスク「やっぱ、ニューリーダーは俺だよなあ。」

メガ様「……………」

スタスク「え、メガトロン！？……様？」

メガ様「スタースクリーム。この愚か者メガ！」

スタスク「メガトロン様！お許しを！ヤメテ！撃たないで！」

メガ様「馬鹿者！ワシも今日と言う今日は許さんぞ！」

スタスク「ぎゃ、ぎゃあああああああああああああああああ」

スタスク「ゆ、夢か…………。良かった…………。」

音波「『愚か者メガアア！』」

スタスク「ほ、ほんぎゃあああああああああああああ！」

音波

(「これは録音したものだと言いつのに。情けない・・・。)

## イカトンボの戦い

スラスト、ダージ、ラムジェットは敵の動向を掴み、今その周辺に差し掛かった最中だ。

だが、ここは第二三学区。空からの警備が嚴重な場所。そして彼等も空に居る。

及んで彼等は何時見つかってもおかしくない状況に置かれている。

にも関わらず彼等は隠れもせず堂々と目的地へ突き進んでいる。彼等はその事は一切知らないからだ。

ちなみに今はビークルモードだ

「おいおい、何か後から戦闘機が追ってくるんだが。」

一番後ろを飛行しているダージが言った。

彼の言うとおり後方には、学園都市制の戦闘機が彼等をつけていた。

恐らく、偵察機であろうそれは攻撃する様な感じは無かった。

「さあ、ただの物好きだろうよ。」

真ん中を飛行しているスラストが興味なさそうに言う。

「ほっとけ」

続いて先頭を飛行しているラムジェットが言う。

一方、スラスト達を追っている戦闘機のパイロットは焦っていた。

なにせいくら通信でこの区域から出ていく様に言っても応答が無い。

「まったく、何なんだよ。あいつ等。ここに潜入しやがって。しかもF15イーグルじゃないかッ。どんだけ旧式だよッ」

学園都市の兵器は他国より何世紀も技術が違う。よってF15イーグルとなると彼らにとってかなりの旧式と言う事になる。

だが事実、この戦闘機は『彼等』には勝てない。『F15イーグル』ではなく『彼等』には絶対敵わないのだ。

「おい、何か後の蚊蜻蛉ウゼエから撃ち落として良いか？」



血の気が多いダージが鬱陶しそうに言う。

だが、突然 爆音が鳴り響く

後の戦闘機が撃ち落とされ、破壊された音だった。

だが撃ち落としたのはダージでもスラストでもラムジェットでも無い。

3人は当然の出来事に停止しトランスフォームする。

周りを見渡すと、何やら数十体の黒い顎長ロボットに包囲されている。

「な、なんだコイツ等ッ」

「落ち着けスラスト。こう言う時はタイムマシンを探すんだ。」

「ラムジェット！お前が落ち着け！」

スラストとラムジェットの漫才を無視しつつ、ダージは提案した。

「いや、この場合コイツ等をぶっ殺せば良いんじゃないか？」

「「……………」」

「「それもそうだなッ」」

余りにも馬鹿っぽい会話だが彼等はダージ以外 知能数が乏しいため仕方がない。

彼等は戦闘を開始する。

「いつちよスクラップになりなッ」

3人は銃撃を開始する。

撃たれた機体に風穴が飽く

撃たれた機体はまるで砂の様に消滅していった。

「やれやれなんてヒデエ有り様だ全く呆れたもんだ。」

ダージがヤ右手で敵を撃ちつつ 左手でヤレヤレとジェスチャーする。

だが、そう簡単には事は終わらない。

ワイヤーが三人の体に巻き付いた。

彼等は抵抗するがワイヤーはビクともしない。

そして、その隙に敵は攻撃しようと武器を構える。

敵はジワジワと近ずいてくる。

このままでは彼等は無事どころかスクラップ、あるいはただの鉄クズになってしまうだろう。

「ちょ、どうすんだよ！このままじゃ俺達がスクラップになっちゃうッ。」

スラストが弱音を吐く。

だが、ラムジェットは状況を打破する方法を思いつく。

ラムジェットは胸のミサイルポッドを展開させる。

彼は数十個のミサイルと発射させ、そのミサイルが周りの敵を粉碎すると同時にワイヤーを持っていた敵にも直

撃した為、ワイヤーがほどける。

それと同時に三人はミサイル、ビームを一気に放出、発射させ、その場の全ての敵を破壊した。

「頭は使いようだな。」

ラムジェットは得意げに言う。

その表情はニヤニヤしており、まるで人を小馬鹿にする様な顔だ。こんな顔をすればいくら性格が良い者でもぶち切れそうな顔であった。

「ん、なんかムカつくが正直に感謝するぜ。」

スラストが歯を食いしばりながら悔しげに言った。

彼は今にでも殴り掛つてきそうだが、仮にも命の恩人。彼は恩を仇で返すような性格ではない為そこは我慢した。

「おい」

「なんだ？ダージ」

「時間————無いぜ？早く行かねえとミッション失敗になっちまうぞ」

「……………」

彼等に時間は無い。

戦え！イカトンボ！

戦え！イギリス清教の為に！

## イカトンボの戦い（後書き）

アイアンハイド「俺達の出番は……まだか……」

ラチエット「ネタばれだけど実は私も来ているんだ！」

プロール「出番って。なんだろ……」

アイアンハイド「俺たちは一緒に殺されたんだっけなあ。」

ラチエット「3人生き返ってよかったよ！」

ゴング「……………」

## 新ジェットロンVSイケメン&クローン（前書き）

スラスト「俺達はデストロンに所属してたけどさ。なんか、大変だったよな」

ダージ「まあ、確かに。雑用とかやらされてたし……。」

ラムジェット「俺は雑用ばかりじゃなかったけどね！」

スラスト「イラスト

ダアジ「そうだけ？俺達とイメージがあんま変わんないと思うぜ？」

ラムジェット「え？本気と書いてマジで？」

ダアジ「マジで」

ラムジェット「マジかよ……。」

赤ゲソ（っふ。ラムジェット、ザマア」

## 新ジェットロンVSイケメン&クローン

ここは第二三学区。

学園都市の中では警備が厚い学区であるからして、侵入者の少ない場所だ。

そして此処は中でも航空機関が盛んな場所でもある。

今、空の色は紅。

美しい夕日が辺り一面を照らしてくれる。だがその空も終わりが近く、空は紅と黒が混ざっている。

「おい、どうすんだ土御門。第二三学区ってば、もの凄い警備態勢なんだから？」

ついさつき建物の陰に來た上条、ステイル、土御門は警備の厳重なこの場を断ち切る隙を探している。

「いや、かみゃん。どうも様子がおかしいぜ。」

上条は飛行機や戦闘機が着陸する航空発着場を見渡す。

そこには、飛行機などが並んでいる



「ッ」

何故ならそれは『正常』な飛行機では無かった。

だがそこには飛行機はあるのだがそれは粉々に破壊されスクラップと化している。

そしてその全てが爆破された様だ。

「な、なんだこれ……。」

上条は我が目を疑った。

何故ならここは警備が厳重な場所。爆破テロでも立ち入れない場所だ。

そして彼が思い当たる者は今の所一人しか居ない。

「まさか、あの魔術師が?!」

上条の疑問に土御門は険しい表情で返答する。

「いや、あの女の本来の目的は『学園都市の破壊』じゃなく『学園都市の制圧』だ。第一、あの女ならこんな被害を出さずに此処を突破できる筈だ。」

「じゃあ、誰が……。」

「あのロボット、だろうね」

先ほどまで黙っていたステイルが言った。

ロボット——ロボットと言えど数えきれない程種類がある。

だがそのロボットは自我を持ち、強力な力と頭脳を持った宇宙の機械生命体。及び、エイリアンだ。

「！」

それは上条のにとって最も聞きたくなかった物だった。

彼の幻想殺し（イマジンプレーカー）は『異能の力』ならどんなに強力で壮大な物でも打ち消す事が出来る。

だが彼にはそのロボットに抵抗できる力が無い。

だが相手は『ロボット』。幻想殺し（イメージブレイカー）は発動する根拠は無い。

「確かあの顎長ロボットは、ローマ正教に協力していたと考えられるしね。」

「クソッ。こつちに勝ち目はねえのか!？」

「居たぞッ」

土御門が小さな声で叫ぶ。

彼の視線の先にはあの顎長ロボットがいた。

そしてそのロボットは腕を組み、周りを見渡している。

だが一人ではない。同じ姿で色が黒いクローンが複数いる。

クローンの中には、なにやら尖った角がある者が一人いる。そしてその他のクローンそれぞれ 操り人形のように 正常とは思えない動き方をしている者もいれば野獣の様な狂った者もいる。

多分、奴等に見つかれば上条達の命は無いだろう。

こちらにはステイル、土御門がいるが恐らく一気にあの数と戦って勝ち残る事は不可能だろう。

多分、奴等に見つかれば上条達の命は無いだらう。

そして、上条達の目的、オリアナ・トムソンもいる。が彼女はほとんど遠ざかっていく。このままでは

「早くでてきやがれえ 人間がッ。このイケメン、スタースクリーム様が相手になるぜ！」

イケメンこと Aスタースクリームは何処にいるか解らない敵に叫ぶ。

その声には余裕と怒りの念が籠めていたが 他のクローン達からすれば怒りの念しか感じられない。

「ボス恐らく敵は我々に恐れをなして現れないと予想できます。このままほっとけば、リスクが少なく、より効率良くミッションをこなせるかと。」

クローンの指揮官、ドレットストームが落ち着き冷静かつ冷徹な声でAスタースクリームに問いかける。

「チツ。だけだよ、敵を殺すとスッキリするじゃない眠れるじゃない。」

「ですが、そうするとオリアナ・トムソンが黙っていませんよ。彼女は犠牲が出る事を望んでませんから。」

そんな会話の中、一人の荒っぽいクローンが話に突っ込む。

「メンドクセエー！あの女ごと破壊すりゃあ良いんじゃない。」

だが彼の言葉は最後まで続かない。

Aスタースクリームの閃光がクローンの顔面にブチ当たる。

クローンの顔はまるで風船が割れるように弾け、その破片はそこらにぶちまけられる。

顔を失ったボディはガクン と倒れると砂が崩れ落ちる様に消滅する

「たつく。馬鹿ですかあ?! そんな事したらローマ正教からご褒美が貰えないだろ! せめて潰すならこの件が済んでからにしゃがれ! イケメンプンスカッ!」

Aスタースクリームの表情は怒りが強調されていたが少し 笑いも含まれていた。

彼は余程このミッションを成功させる自信があつた。なにせこの大量のクローンと再生能力を持ちまさに不死身な自分。

まさに最強とも言える軍団をもっている。この軍団なら、一つや二つの国を制圧するのは容易い事だ。

彼はその自信の上で笑っているのだ。

「ボス。仲間を一人失いましたが・・・大丈夫ですか。」

ドレットストームは少し焦りを見せる。だが現に大勢いる仲間を一人失っただけ。トータル的に痛くも痒くもない。

例えば、ご飯茶わんに入っている何百、何千のご飯粒の一つが無くなる程度。

だが彼は少しでも有利な状況を保ちたい性格であつた。どんなに細かい物でも無くなると少数単位だが事実、勝率は減る。

周りがどんなに些細な事だと思おうと、彼にとっては大きな事である。簡単に言えば心配性だ。

彼はそう言う性格なのだ――生みの親Aスタースクリームが悟る。

「シヨウガナイナ。イケメンマジック」

そしてAスタースクリームは、破壊した飛行機の残骸に手から生み出した青い火の玉の様な物を投げつける。

炎が残骸に直撃すると、さっきまでスクラップだった物がクローン2体に変換された。

技名はダセイがまさに文字道理『マジック』だ。

「くそっ何か良い方法は……。」

上条達は悩んでいた。目的はすぐそこに居るのに、それを阻む巨大な存在がある。

今ここで突っ走ってもゲームオーバー。かといってこのままで時間

が過ぎててもゲームオーバー。

今の状況ではどの道ゲームオーバーだ。

この状況を打破するにはあのロボット集団に対抗できる徹底的な何かが必要だ。

だがそんな状況の中、土御門がにやける。

それに気づいた上条とステイルが不信感を覚える。

土御門の先には3機の戦闘機。それを見たステイルが土御門の笑いの意味を理解する。

「やっときたか……」

だが上条は全然訳が解らない。そして答えを求める。

「やっと、てステイル。どう言う事だよ？」

「助っ人が来た……って所かな？」

ステイルの視線の先にあったもの、それは



「トランスフォーム！」

3機の戦闘機——ラムジェット、スラスト、ダージはロボットモードトランスフォームに変形する。

その存在にAスタースクリームはきずいた。

「敵さんのお出ましかよ。そんじゃあ、始末しな。」

彼の合図とともに、ドレットストーム含むクローン達は総勢で3人の元に飛び立つ。

「うわッきやがったッ！」

スラストがビビる。

「ビビってんじゃねえよ！こつ言つ時は皆殺しにすりゃいいんだぜ  
」！」

ダージは胸のクラスターミサイルと両腕のビームを一斉発射する。

複数の爆音と共にその数だけの敵が破壊され、その破片が地上に落ちていく。

そして、この場は紛争地帯と化した

「ダージよお。相変わらず血の気が多いな、ええ？」

ラムジェットは攻撃しながら呆れ気味に言い放つ

「くっそ、数が多すぎるぜッ」

「スラスト、お前ビビりすぎ。」

「うっ、うるせ——ぎゃッ」

戦闘中にも関わらずそんな会話をしていた為か、三人は また また ワ  
イヤで巻きつかれてしまった。

「な、なんかデジャヴなんでけどッ」

「スラスト、こう言う時は落ち着いて、タイムマシ——。」

「ラムジェット！？そのネタ古い！そしてお前が落ち着けッ」

ピンチなのだがそうには見えない会話をいる。そして三人は地面へと落下していった。

ドシンッ 轟音が響き渡った。

だが、運が良かったのか悪かったのかワイヤーは見事に外れていた。

「頭に來たぜ！皆殺しだ！」

「お前『皆殺し』今日何回言いやがった？！」

「くそぉ～早く終わらせたいぜ。」

だが安心したのはつかの間。

閃光が三人を直撃した。

「ぐあッ」

閃光を放ったのは地上にいたAスタースクリーム。

彼はいつも以上に にやけていた。

「おやおや、立派な頭だなあ。イカトンボクン。」

「イカトンボ、言っんじゃないやねえ！」

スラストはミサイルを放つ、それはAスタースクリームの顔面に直撃し、彼は顔から爆発した。

「ギャッ」

物凄い爆音が聞こえ、彼はバラツバラに砕け散る

が、彼の破片と部品が元の位置に吸い込まれる様にくつつき再生する。

しかも彼の体は以前よりもピカピカで新品の様だった。

「そしてイケメン、何事も無かったかの様に不敵に笑う。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・アレ？」

スラストはフ抜けた声を出す

もう意味が解らなかったのだ。確かにミサイルは直撃し、敵はバラバラに吹き飛んだ筈なのに、彼はこうして笑っている。

「ありや。おつかしいな、不発弾？」

Aスタースクリームはムツとする。スラストの反応が気に入らなかつたのだ。

「馬鹿か！？俺様が再生したんだよ！？見て解るだろうがッ！」

「え？またまたあゝ。」

Aスタースクリームの表情は怒り一色となった。

今にも爆発しそうな彼の顔を見れば、誰でも怒っていると解るだろう。

ラムジェットとダージはそれを察知し、アタフタし始める。

だがスラストは――

「なあ、コイツ頭大丈夫なのか？」

( ちょ馬鹿野郎！如何にも怒ってるだろっがッ )

( ここは、相手の機嫌を…… )

「はあ？この顎長が？」

その瞬間、Aスタースクリームの『何か』が切れた

---



新ジェットロンVSイケメン&クロン（後書き）

ドレット「私はドレットストームです。ドレットウイングではありませんよ。言いやがったら『ぶち殺し確定』です。」

スタスク「アシッドストーム。」

ドレット「……………」

スカワ「サンストーム？」

ドレット「……………」

サンクラ「ちょ。ほどほどにな。サンドストームが怒るぜ?」

ドレット「フザケルナー!!!馬鹿野郎オー!」ビーム

ジェットロン「『あぶねッ』」スカ

イケメン「イケメン避けるべし!」スカ

ユニクロン「アブネ!」

スタスク「おい今変なの居なかったか?!」

イケメンズの情報（前書き）

ランブル「俺ってさ、海外じゃフレンジーって名前らしいぜ」

フレンジー「奇遇だな、俺も海外じゃランブルなんだ」

ランブル「あれ？名前が違うんじゃないやなくて俺が青いって事か？」

フレンジー「さ、さあ」

ランブル「うん」

フレノラン「謎だ」

## イケメンズの情報

九月十九日 大覇星祭初日

スタースクリーム達は学園都市支配阻止の為、敵が居る航空発着場へと向かった。

「もう始まってやがるな」

スタースクリームはうつすら微笑んでいた。

彼の視線の先には紛争地帯と化した発着場がある。

「おい、ちょっと待て。あれはヒューズがぶっ飛んでる少年じゃないか？」

サンダークラッカーが指を指した先には、ビルの陰に隠れている上条達が居た。

どうやら、この戦いの中身動きが取れないらしい。

「おい、一つ——と言うより三つ気になった事があるんだが。」

『どうした？スカイワープ』

「ラムジェットとスラストとダージが居るんだが……。」

その瞬間、空気が凍りつく。本当に空気が凍ったのではなく、彼等

が凍った様に動かないのだ。

彼等の表情はポカン とするばかり

「馬鹿か？まつさかあいつ等がいやがるはずあ……っっていたあ  
あああああああ？！」

スタースクリームがギョツとする。そしてその他も地上を見下ろす  
と、

顎長スクリーム（スタスク曰く）が3人を怒り狂って追い懸けてい  
る姿。

「しゅ、シユールだぜえ。 あ、 ゴホンツ。じゃあ、カセ

ットロンは人間の援護、その他俺達は、あの大量のアゴ共

をかたずける。OK？」

「「はいはい」「 「解ツタ」

そうして彼等の作戦は開始された。

『フレンジー、ランブル。イジエークト！援護作戦開始セヨ！』

サウンドウェーブの胸が開き中からフレンジーとランブルが飛び出  
す。

「よっしや！俺達の出番だぜー！」

「喧嘩だ〜！」

そして二人は上条達の元へ着地する。

「って誰だ?! 敵か?!」

上条はギョツとし。一緒にいたステイルと土御門も警戒する。

「大丈夫だ。俺達は見方だ。援護しに来たぜ!」

「さあ、俺達が来たからにはもう大丈夫だ!」

「味方だと?」

「信じていいんだね」

その瞬間、彼等を覗きこむ様に、サウンドウェーブが出てくる。

『もちろんだ。』

ステイルはふうん と言うと土御門の肩に手を載せる。

「今は、協力してもらった方が良くないかな?」

「そうだなあ。見方が多い方が楽しにゃ〜」

土御門の言葉を聞き、フレンジーとランブルはコソコソ話をする。

ぷっ にゃ〜ってなんだよにゃ〜って。おかしいだろうが ぷ  
ぷっ

(きつと、人間共の文化なんだ——つぶ)

「あのお二人は何で笑っているのですか？」

上条は焦りつつ問いかけた。

「いや、人間の伝統がおもしろくて はっはっははははははっ」

「っくくくくくくくく。っぶっはっはっはっはっ」

「？」

「まあ、いい。行くぞ」

\*

「ナルキヤノンを喰らいやがれえ！」

「ぎゃああッ」

「はっはっはっは！雑魚が何体いようと、雑魚は雑魚だな！」

スタースクリームは高笑いを上げる。

だがその隙を突かれ、クローンのビームが背中に直撃した

「ぐあああッ。いってなあ！」

スタースクリームはミサイルをクローンに打ち込む。

爆音と共にクローンは碎け散った。

「さあ〜て。イカトンボ共に挨拶してやろうか」

\*

「ゴメン！謝るから許してくれえええ！」

スラストが叫ぶ。だがAスタースクリームはビームを乱射してくるばかりだ







予想以上の驚き方にスタースクリームは戸惑いを覚える。

なんだ、この驚きようは、叫び魔かつの と内心思った。

「驚きすぎだ馬鹿。」

だが、お喋りしている間にAスタースクリームは再生していた。

そしてスタースクリームに銃口を向け、ビームを数発 発射した。

「イケメンビームッッ！」

「あん？つてギャッ」

スタースクリームは撃たれ、そこから爆発が発生した。

大きな爆音が鳴り響き、煙が一面に広がった。

だが

「いつてえな。頭来た。テメエから潰してやらあ！」

本当に痛いと感じていない様な言葉でそう言い放った。

Aスタースクリームのデュアルソニックブラスター（通称イケメンビーム）は強力な破壊力を持っている筈だった。

それも大物の敵を一撃でノックアウトさせる程の

だが彼は無事だった。

そしてスタースクリームはAスタースクリームに急接近し、その速度を生かした飛び蹴りを放つ。

さらに、顔面に数発パンチを打ちこみ、短距離からのクラスタミサイルを放った。

「イケメン台無し……ッ。ってこんなんじゃ死んでたまるかッ！」

彼はすぐに再生すると、顔面目掛けて回し蹴りを放った。

「グアッ」

そこは地上では無く、空中だった為スタースクリームはバランスを崩してしまった。

「喰らえよコンチクショー！」

Aスタースクリームは一体何処から出したか解らない程の巨大なハンマーを一気に振り下ろす。

ガゴンツと機械と機械がぶつかり合う轟音がスタースクリームの頭

をよぎった。

次の瞬間、スタースクリームは キュウンツともの凄い音を立てながら地面に向かい、墜落する。

「ッ」

彼はあまりの衝撃に、声も出なかった。

そして体の節々に痛みを感じる。なにせ特大ハンマーをくらってさらに地面に墜落したのだから。

「ヘッヘッヘッ。今息の根と止めてやつから、覚悟しなァッ」

Aスタースクリーム地面にゆっくり着陸すると、不気味な笑みを浮かべ、さっきの特大ハンマーを構える。

「まってくれッ。俺が・・・俺が悪かった！許してくれッ！お願いだ！」

スタースクリームは手をパーにしてを前に突き出しやめてくれと言う。

だがAスタースクリームはジワジワと近ずいてくる。

「いまさら命乞いなんかみつともねえぞ。正々堂々を戦えよ」

「待てマジで！早まるな！手荒なマネはよそうじゃないの！」

「うるせえー！こちゃこちゃ言っていないで戦え！」

そしてAスタースクリームはダッシュで彼に接近する。そして距離が一気に縮まった。

だが

その瞬間スタースクリームの表情が一変した。その表情はさっきの恐怖ではなく無表情。

気味の悪いくらい無表情だった。

「なぐんて」

素っ気なく言い放つと、前に突き出した腕に装備していたビーム砲がナルキャノンを放つ。

閃光が真っ直ぐに飛び、Aスタースクリームに向かう。

当のナルキャノンに狙われた敵は訳が解らずアホみたいに口をポカッ、と開けているだけだった。

直後、その口の中にビームが直撃。

彼の頭は何処かへ引き飛ばされた。

「イケメン台無しイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
・・・・・ツツツ」

そして数秒立った後、『再生能力』が発動するもボデイは頭を追い懸けるかの如く、そのまんま頭の向かった方向へと飛んで言った。

それを見届けた後スタースクリームはブツ、と吹き出し

「はっはっはっはっは！テンションが上がった奴をぶちのめすつてのは、最高に気分が良いぜえええええええッ！」

いきなり笑いだした。

「あ、悪魔だ・・・・。」

近くでそれを見ていたラムジェットが呟く。

スラストとダージも同感の様で頷いた

\*

サンダークラッカーとスカイワープは無数のクローンの相手をして  
いた。

無数と言ってもその大半はすでに撃破し、現状はこっちが圧倒的に  
有利だった

サンダークラッカーがソニックブーム、ファイヤーアタックなどで  
応戦、

スカイワープはお得意のワープ能力で応戦していた。

ちなみにスカイワープは、前までワープをあまり使いこなせなかつ  
たが、進歩し使いこなせるようになった様だ。

「チッ。どこに行きやがった！」

クローンの一人が鬱陶しそうに言う。

だが、もうすでに彼の後に敵は迫っていた。

「こっちだよ！」

スカイワープがワープ能力を使い、背後に回ったのだ。

そして、彼の可変口径マシンガンがクローンの体を捕らえる。その弾丸はクローンを打ち抜きクローンを撃破した。

一方、サンダークラッカーは――

「うおおおおおおッ！」

空中で、クローン達はサンダークラッカーに襲い掛かった。

ある者は剣を、ある者は銃器などを装備していた。

剣を持ったクローンがサンダークラッカーび切り掛る。

だが、サンダークラッカーはそのまま黙ってはいない。

彼は腕にエネルギーメイスを装備した。

銀色の棒の先がハンマーの様に大きくさらにその作用点に紫色のトゲが複数とりつけられていた。

そして彼はクローンの斬撃をメイスで受け止めるとメイスを一気に振り回し敵を振り払った。サンダークラッカーをその隙を突き、高



速で敵の懐へ移動すると一気にメイスを叩きつけた。

ガキン、ゴシャツと鉄と鉄がぶつかる轟音と敵が潰れる破壊音が響く。

敵のパーツはグシャグシャになり、パーツとパーツがバラバラになっ  
ていった。

だがサンダークラッカーの猛攻は終わらなかった。

今度はクラスターミサイルとソニックブームを発射させ、敵を一  
気に蹴散らす。

敵の数だけの爆発が起こり、爆発の数だけ敵が破壊された。

「おい、そっちは終わったかい？」

「ああ、終わったよ。」

スカイワープの間にサンダークラッカーは呆れ気味にあっさり  
と答える。

そのあっさりさから、彼にとって余裕な戦闘であった事が感じられ  
た。

だが、敵は『ただのクローン』だけでは無かった。

「中々の腕ですねえ」

突然、第三者の声が聞こえた。

そして二人は第三者の声が聞こえた方向に体を動かさず顔を向ける。そこに居たのはついていて、すこし目つきが悪いクローン。

そう、クローンをまとめるリーダー、ドレットストームだった。

「お前さんかい？親玉は……」

スカイワープが聞いたです。

「いえ？私はクローンをまとめているだけ。トップはスタースクリーム様です。」

スカイワープの問いをあっさり否定した。

実質的なトップは彼等を生み出したAスタースクリーム。と言う事だった。

「じゃあ。お前は俺達と戦うって事になるのか？」

サンダークラッカーが言う。

明らかにこの流れだとドレットストームと戦う事になるだろう。だが――

「いいえ」

これまたあっさりと否定

「「はあ?!」「」

ジェットロンの二人の声が重なる。

いや明らかにおかしいだろうが! と言った表情だ。

「見たとおり。私は仲間がいません。これじゃく明らかに私が不利ですから」

彼の性格は、自分がわずかでも不利になると焦りわずかでも有利になりたい。と言った性格だ。

こんな状況では明らかに有利どころか、勝ち目も無いだろう。だから彼は戦闘を拒んだのだ。

「じゃあ、なんで出てきたんだよ。さっさと逃げればいいじゃないか!」

スカイワープはもつともな事を言った。考えても考えなくても。ここで敵に顔を出せば何の利益にもならず逆に損が多いだろう。

「.....さあ?」

「.....」

二人はもう言う事の無い。もうツツコムべき所はもうツツコンだ。これ以上ツツコム気は無い。といった理論だった。

理論と言うよりは自分に言い聞かせている感じだが.....



イケメンズの情報（後書き）

スタスク「俺はジェットロンのリーダーで」

スタスク「航空参謀でもある。そして」

スタスク「何時しかガルバトロンを殺る男でもある訳だ」

スカワ「ガルバトロン？誰だそれ。メガトロン様にたいな名前だな」

サンクラ「どうせ、メガトロンもどきだろ。」

スカワ「メガトロン様は今どうしてるんだか」

サンクラ「俺の予想からして、星となったに違いない」

スタスク「おい」

サンノスカ「なんだ」

スタスク「お前らメガトロンに忠誠を誓っていたのか？」

スカワ「俺は誓っていたが？」

スタスク「お前は？」

サンクラ「いや、俺はどちかっていうと、誓ってない」

サンクラ「大体、俺は宇宙征服するって事自体嫌だったんだ！」

サンクラ「第一、メガトロンに従ってこのザマだ！」

サンクラ「闘っても傷つくだけじゃねえか！そしてな——」

スタノスカ「……………」

**Imagine Breaker (前書き)**

スラスト「どうせ、俺たちはやられ役だよ……」

ダージ「そんな事言つなよ……」

ラムジェット「大丈夫だ。作者が良い方向へ導いてくれるさ……」

## Imagine Breaker

『ターゲット、発見シタ。フレんジー、ランブル！妨害作戦開始！』

サウンドウェーブの掛け声と共に、上条、ステイル、土御門、フレんジー、ランブル等はオリアナの元へと向かう。

サウンドウェーブも行こうとしたが、突然通信が入った。

『おい、サウンドウェーブ。良いか？今すぐ此処に来い。来ないと俺を含むメンバーから八つ当たりの対象になる事になるからよ』

『ハア？？どう言う事ダ？？』

『エネルギーだよ！エネルギー！お前しかキューブを作れねえんだからよ…………』

『……………解った』



そう言っただけは、スタースクリームの元へ向かった。

\*

此処はさっきまでサンダークラッカー達がクローン達と戦っていた場所だ。

戦闘が行われた事でそこらじゅうボロボロだった。

そして、クローンの消えた後にはエネルギーがドツサリと溢れている。

「で、なんでお前等が此処に居るか聞かせてもらおうじゃねえの」

スタースクリーンは堂々とした態度（腕組をしている）で言い放つ。

それに対してイカトンボ達（ラムジェット達）は

「それはこっちの台詞だ。」

さらにそれに対しスカイワープが言った

「いいから早く答えてくれんかね？唯でさえそのとんがり頭に……  
・ぷっ、笑いを堪えていると言うのに……」

彼は今にでも吹き出しそうにニヤニヤしている。

さらのさらにそれに対しダージは苛立ちを覚えた。

「んだと？イカトンボはスラストだけで十分だろうが！」

その瞬間、スラストの怒りの一撃がダージの顔面にヒットした（飛び蹴り）

その美しい飛び蹴りは、恐ろしい轟音を響かせ仲間と粉砕した。

「いつて〜な！何しやがる！事実を言っただ——ゲボアアツッ」

スラストは頬笑みながら、倒れてるダージの上に馬乗りになってダージの顔面を何回も何回も打ん殴った。

「事実う？ 事実はお前もイカトンボって事だよ。」

「イデッ、ヤメロ！ 俺達、仲間でやりおう、ギャッ（だろうが）」

「お、おい。 やめるよ・・・」

それを止めようとサンダークラッカーはスラストを落ち着かせようと乗り出すが、スラストの拳は止まらない。

それはいくら温厚で、どちらかと言うと平和主義なサンダークラッカーでも止められなかった。

だが、次の瞬間。 スラストの猛攻は止まる

「ほつとけよ。 どうせイカトンボ共は喧嘩を止めねえーぜ？」

スタースクリーンが爆弾発言を言ったからだった・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。 なんだって？」

黙っていたスラストまで眉間にシワを寄せながら言う。

「お前。今イカトンボって言ったな……。」

スラストもラムジェットとほぼ同じ表情で言う。

「も、う……。どうでも、良いや……。」

だがダージは殴られていたので、KOしていた。

「なんだ？イカトンボがそんなに嫌か？解ってねえな。ロボットってのはスパークがボディに憑依するのは自動的かつ運命てきた。どんなボディになってたもしょうがねえ事だ。」

だがな、とスタースクリームは続ける。

「折角与えられたボディに文句なんざ言うんじゃないやねえッ！俺をしてみる。堂々とした態度で生きてるだろうが！」

なんだか良い事を言った様だが、彼のボディはコンプレックスなど全くない（サンダークラッカー、スカイワープ同様）

だからそんな事が言えるのだろう。なんて幸せ者なのだろうか……

「何？なんか言ってる事目茶苦茶なんだけど……。ついにナルシスト魂がパーソナリティーに燃え移って、ヒューズがイカレちかったんじゃあねえのか？」

サンダークラッカーが思むろに呟いた。

「ナルシストもあそこまで行くと哀れだね！」

スカイワープが叫ぶがスタースクリームには聞こえない。

それどころか あ、それと、 と呟くと――

「まあ。デストロンーの美形とは、俺様の事なんだがな」

自分の自慢話までし始めたのである。

「いや、同じ顔じゃねえか……。」

同型のサンダークラッカーが呆れたかつ若干引きずった表情で言った。

「アイツのナルシストぶりは見てるだけで身の毛がよだつぜ……」

同じくスカイワープもほぼサンダークラッカーと同じ表情で言う。

そう、元々彼等のボディは色と性能は違うが同じなのだ。同型のボディにスパークが宿った為だった。

それは二人だけでは無い。ジェットロンと言う部隊員は三人だけでは無いのだ。

アシッドストーム、サンストーム。さらにその他何十、何百体も居るのだ。

だが当のスタースクリームは現にそれを無視しデストロンーの美形と名乗っている。

だがまあ、それを逆手に取れば彼等は全員美形と言う事になるが・・・

こうしている内にもイカトンボ達は怒りが限界に達し。スタースクリームに飛びかかった。

「おらあ！くたばれこのナルシストが！何時も腰ぬけの俺だと思っ  
なよ！」

スラストが殴り掛る。

スタースクリームは腕でガードを繰り返す。

「な、なにしゃがる！俺はただ慰めただけなのに――」

「うっせえ！体当たりでも喰らっつけ！」

ラムジェットはトランスフォームし、お得意の体当たりを繰り返した。

ドゴオン 轟音が炸裂しスタースクリームはスラストごと吹っ飛んだ。

「この野郎！俺まで巻き込んでどうする！」

「め、メンゴ・・・」

ラムジェットがビークルモードのまま謝る。

「クソがあああああ！」

スタースクリームが咆哮を上げる。

手を強く握り、怒りの限り叫んだ。

そして彼の怒りの鉄拳がスラストとラムジェットを一発で殴り飛ばした。

「あいだッ」

「NOOOO！」

正確には最初にスラストに直撃。そして吹っ飛んだスラストがラムジェットに激突したのだ。

吹っ飛んだ二つのトンガリは、倒れているダージの上に重なる様に乗った。

「ソゲブ！」

ダージが更なる激痛に叫びざるおえなかった。

「く、くそ……。結局俺達は……。やられ役なのね……。ガクッ」

三人は完全に（ダージは特に）気絶した。

「まったくよお！俺は慰めただけじゃねえか！」

「いや。当たり前怒るだろ……。」

サンダークラッカーが引きつった表情でツッコむ

スタースクリームは それにしてもよ、と話を切り替えた。

「サウンドウェーブは、何時組んだ？戦闘は部下に任せてお前は来い、と命令した筈だったんだがなあ。」

だが噂をすればなんとやら。サウンドウェーブが遠くからコッチへくる所が視界に入った。

『来たぞ』

「遅いぜ。早く雑魚共から出てきたエネルギーを回収してくれよ。」

『俺一人では無理だな。お前達も手伝って貰うぞ。』

「チッ」

ふとその時。サウンドウェーブは視界に頭が尖った変な物が映りこんだ。

『……イカトンボか？』



だが返事は無い。すでに気絶しているからだ。

それに対しスタースクリーンは あく、と呻りながら。

「俺が黙らせたぜ。少々うるさかったものでな」

ほぼ呆れた表情だった。よほど哀れだったのだろう。と言うか、今すでに三人重なっている状態だった。

『……………。エレルゴンキューブを作ると、するか』

そう言うと、彼はさっそくエネルギーキューブを胸から出現させた。

そうするとスカイワープがメンドクセーナと言った。そう言いながらもここから皆は共同作業でキューブにエネルギーを詰め始めた。

\*

カセットロン含む上条達はオリアナを追う為走っていた。

オリアナはもうすぐそこに居たが、そのには大きめのフェンスがあった。つた。

そして先頭を走っていた土御門がフェンスを登ろうと手を掛けた。

その時ふと、上条は変な物が視界に移りこんだ。よくみるとフェンスに白いメモ帳の様な物があつた。

だが上条は一瞬で理解した。あのメモはオリアナが使っていた武器である。よつて罠。と言う事はフェンスに触れたら何かしら攻撃が発動する、と

「待てッ土御門！」

上条は叫んだがもう遅かつた。彼はすでにフェンスに触れていたのだから

「なんだ？かみやん」

土御門は突然呼ばれた事に不信感を覚えたが、突然フェンスが青く発光する

瞬間。彼の体に電撃が走る

「う、うあッ！」

土御門は衝撃で後の方へ吹き飛ばされた。

「だ、大丈夫か？」

フレンジーが駆け寄つた。

「行けよ、そのページを破壊して四人で、行けッ」

「お前はどつするんだよ！ステイル！お前の魔術で治せないのか？  
！」

上条は叫んだ

「あちらがそれを待つものか！」

ステイルは視線をオリアナへ向け、忌々しそうに言う。

「上条当麻！」

今度はステイルは叫ぶ

「うおおおおおおおッッ」

上条はフェンスにくっついていてるページを殴りつける。

その時かれの幻想を殺す『幻想殺し』が発動する。

パキンツ とガラスが割れる様な音が響きそのページの効果は失われた。

そして上条とステイルがフェンスを登ろうとしたが、フレンジーとランブルがそれを止める。

「待てよ」

フレンジーが言う。

「何だ！」

スタイルが鬱陶しそうに叫ぶが

「登るより壊す方が早いだろうが」

ランブルがそう言うと二人は両腕をハンマーアームに変える。

そしてそのアームをフェンスに叩きつけると

グシャツ とフェンスは一気にグチャグチャにひしゃげ、通り道が出来た。

上条が凄そうな表情を浮かべながらもフェンスを楽に潜り抜ける。

オリアナはそれを良しとせず一気に潰しに掛った。

メモ帳のページを口で引きちぎる。

その瞬間、彼女を中心に強烈な風が発生し、上条達へ突き進んで行った。その竜巻の威力は地面を削り取る程のものだった。

上条は右手を突きだす。そして、その竜巻の様な風と右手が衝突した。彼の幻想殺しが発動し、打ち消——さない。

その竜巻は常に発生している物だった。彼の幻想殺しがいくらか打ち消しても常に発生しているば打ち消せきれないのだ

スタイルはルーンのカードを懐から出す。

「この手に炎を、その形は剣、その役は断罪い！」

その瞬間、魔術が発動。彼の右腕から3000度を超える炎剣が生み出される。

そしてその炎を上条を援護する形で竜巻にぶつけた。

そしてドゴオンツ 爆発が起こった。だが彼等はモタモタしてられない。

「よっしゃ！行くぜ！」

フレンジーとランブルが突き進む。

デストロンの血、と言う物が騒いだのか妙にハイテンションだ。

「急げッ」

ステイルが上条に呼び掛ける。

そして上条とステイルはオリアナへ向かってゆく。

「うふ、やっぱりあの聖人は来ないわね。となるとそちらは3人と2体って事かしら？」

オリアナは余裕の笑みを浮かべながら新たにページをちぎった。

その瞬間、ゾワァツと何かが彼女を中心に広がった。

「結果かッ。あらゆる通信を切断したな！」

ステイルは走ってる最中に行った。その為多少息切れをしていた。

そして彼はさらに炎剣で攻撃する。

炎が呻りを上げオリアナに襲い掛かる。

だが彼女も黙っていない。オリアナは新たにページを千切り取り左手に持ちながら敵へと付きだす。

そして左手から巨大な水の塊が出現する。その水の塊は炎を消化した。だがそれだけでは終わらない。

さらにその水はステイルに襲い掛かる様に向かっていった

「ぐあッ」

その水はすつぽりとステイルを自らの中へ閉じ込めた。

このまま窒息させるといふ戦法なのだろう。

「す、ステイル！」

上条が叫んだが、その隙を狙いオリアナは上条の腹部へと強烈な蹴りをいれた。

そしてお次は回し蹴りで彼を横へと吹き飛ばした。

彼の体は宙を舞いドシャツと転げ落ちた。

「あら、片手だけで満足する程、お姉さんは感じやすくないわよ？」  
相変わらずの余裕の笑みで言い放った。

そして当のフレンジーとランブルは腕をハンマーアームに変える

「じゃあ、フレンジーと」

「ランブルの必殺技、」

「ハンマーアームを受けてみるお！」

そして彼等はハンマーアームを地面へと叩きつける。

そして巨大な地震が巻き起こり、オリアナが立っている地面に地割れが起きた。そして地面が割れ回り一面に粉じんと煙がだらけとなった。

「へへ、どうだ！」

フレンジーは子供の様に言った。

「スタースクリーム達より小さいからって馬鹿にすんじゃないぞ！」

同じくランブルも子供の様に言った。

だが

「お姉さんは、地震並みの振動じゃ感じないわよ」

突然、彼女の声が聞こえた。

フレンジー & amp・ランブルは慌ててビームを乱射する。ビームが煙の中へと入って言った――が

突然、そのビームがそのまま彼等二人へ帰って来た。

「う、うわあああッッ」

二人に数発直撃し、そのまま吹っ飛ばされてしまった。

彼等の体は宙を舞い2m位飛び地面に落ちた。

「イデッ」

「ギヤッ」

「う、ぐううう」

一方ステイルははまだ水の塊の中にいた。

そして

「砕けるおおおおおおおおおおおお！！」

瞬間、彼の体から3000度の炎が生み出される。



そして炎が水を蒸発させ吹き飛ばした。

炎の爆発的な音と水が吹き飛ばされ蒸発する音が同時に響き渡った。

「あああああああッ　がはッ」

炎剣を構えステイルはオリアナへと突っ込んだ。だがあっさりと彼は顔面に蹴りを入れてしまう。

そして彼の体は2、3回回転し倒れてしまう。

「相変わらず、腰が砕けるのが早いわねえ」

余裕の笑みだった。ただそれだけの感情だった。

そんな中、上条は立ち上がった。

「お前は此処で止める……。使徒十字クローチエティビエトロも使わせない。お前が学園都市をメチャメチャにして、大覇星祭を台無しにするってんなら」

「必ずここで止めてやる！」

オリアナはふつと笑った。

「メチャメチャってのは酷いわねえ。クローチエティビエトロ使徒十字は魔術と科学の壁を取り去る世界中の人々を幸せに導くかもしれないのよ？」

「幸せ？いいな、それ。何となく。それが良い言葉ってのは解る。」

けどな、と彼は続けた。

「俺にとって困るのはテメエが今ここで使徒十字を使って、大覇星祭を潰しちまう事なんだよ!!」

「どれだの人間が大覇星祭を大切に思ってるのか。どんな堅い宗教で身を固めた所でその思いを潰す権利なんて、」

「テメエに有る筈ねえだろうが!!」

「その程度の感情論で、お姉さんが揺らぐと思ってるの?」

小馬鹿にしたように言った。やがて彼女は先頭態勢を整え、

「それ位で傷つく位なら動いて無いわよ。」

「今の台詞、テメエが傷つけた吹寄と姫神の前でも言えるのか?!」

「!?!」

わずかだが、彼女の心が揺らぐ。

「俺が言いたいのは、それだけだ」

だが、と上条は叫ぶ。

「まだこの街で何かやるってなら、その幻想を欠片もの残さず、ぶち殺してやる!」

Imagine Breaker (後書き)

フレンジー「お前は異能ならなんでも殺せるんだろ？」

上条「そうだけど？」

フレンジー「じゃあ、これは打ち消せるか？」ハンマーアーム

上条「い、いや。多分それは無理だと——」

フレンジー「ハンマーアームヲウケテミロー」

上条「じ、地震！？とにかく不幸だ——！！」

## 追跡封じ（ルートディスタープ）（前書き）

ある所に、ジェットロン達がいましてー

スタスク「え〜今から反省会をしようと思うが――」

スカワ「ちよつと良いか？」

スカワ「お前が作戦実行中に『ニューリーダーはこの俺だ！』とか言つて」

スカワ「メガトロン様にけりを入れて『この愚か者メガ』と言われて」

スカワ「殴られて、お前がイジケテせつかく作戦に必要な機械を」

スカワ「ナルビームで破壊したよな！お前のせいだぞ！」

スタスク「なにを！お前だつてなあ、責任は有るんだぞ！」

スカワ「何！？」

スタスク「俺がせつかく作戦を考え、『もつとも重要な役割』を任せた、」

スタスク「そして指示道理お前は、エネルゴンの場所へワープしていった！」

スタスク「だが、なんか帰つてこないと思つて、様子を見てみれば、

「  
スタスク「地面へめり込んでたじゃねえか！」

スカワ「しよ、しょうがねえだろ！遠いところほど制度が落ちるんだからよ！」

スカワ「だが、サンダークラッカー。お前にも責任はある！」

サンクラ「！」

スカワ「お前、『ミサイル十発ブチ込んでやるぜ』って言って」

スカワ「十発全部、ロケット花火だったじゃねえか！」

サンクラ「俺はどっちかって言うと平和主義者だ！」

スカワ「だが、なんかすごく気まづくなつたぞ！」

スタスク「だがまあ。俺があつてのジェットロンだ。俺がいなきゃ、お前らは実力を発揮できねえ」

サンクラ「いや、俺の後輩に強くて有言実行力があり責任を持つ奴で」

サンクラ「『根性が良い奴』が居るんだが！」

スタスク「なに！」

スカワ「じゃあお前さんが今度ニューリーダーとか言いやがった

「らそいつに交代な！」

スタスク「何！お前だってな今度ワープミスったら交代な！」

スカワ「なんだと！」

スタスク「俺の友達に『もの凄い野心家で諦めない奴』がいる！」

スカワ「だったら、サンダークラッカーに交代してもらっぜ！」

サンクラ「はあ！？」

スカワ「こんど、敵に攻撃するのをためらうんだったら！」

スカワ「『戦いを好み凄くデストロンらしい奴』と交代だ！」

サンクラ「やってやるっじゃん！サイバトロンを血祭りにしてやる  
！」

スタスク「俺だってなあ」

---

そして、

アストロ「新しくジェットロンに入ったアストロトレインだ」

ブリッツ「同じく、ブリッツウイングだ」

オクトン「同じく、オクトーンだぜ」

「……」

アストロ「なんつーか、」

ブリッツ「これって」

オクトン「なんか」

「……ジェットロンじゃなくね？」

アストロ「じゃあ、名前を変えるしかねえな」

ブリッツ「なんか無いか？」

オクトン「なんつーか俺たち皆、トリプルチェンジャーだよな」

「……トリプルチェンジャーでデストロン」

「……トリプル……トロン」

「……トリプルトロン……」

こうして、新しいメンバーが加わった



彼らはそこそこ活躍した

一体、デストロンの主戦力、ジェットロン三羽は何処へ消えたのだ  
ろう

## 追跡封じ（ルートディスタープ）

「う、うーん」

スラストは目を覚ました。よく見れば自分は何かに乗っかっていました。

見てみると下にダージ、その上にラムジェット、さらにその上に分が乗っかっていた。

「・・・・・・・・・・」

そしてダージとラムジェットも目を覚ます。

「・・・・・・・・・・」

しばらく沈黙が続いたが・・・・・・・・

「ヴァアアアアアアッ」

突然ダージが叫ぶ。そして上に乗っかっているラムジェットとスラストを吹き飛ばし、立ち上がる。

「おおおおおい！いそがねえとミッション失敗だあああああッ！」

ダムジェットとスラストはしばらくキョトン、とっていたが――



上条当麻は拳を握りしめ、オリアナの元へと全速力で走りぬける。

オリアナは単語カードのような形をした簡略版魔道書、ショートハンド速記原典の1ページを口で千切りとる。

その瞬間、ボオツ、とオリアナを中心に炎が巻き起こる。いや、どちらかと言うと爆発に近かった。

だがこれは自爆などでは無くオリアナは無傷だ。

そして上条は炎に見向きもせず走り抜け、炎に向かって右手をかざす。右手が炎に触れた瞬間『幻想殺し』が発動し、炎が一気に消えていった。

上条は拳をオリアナに叩きつけようとするが、オリアナはサラリと避けてしまう。さらに上条に足に蹴りを入れる。

「わッ」

上条は倒れそうになるが

「あら、良い内に頭が、」

倒れる前にオリアナに頭を蹴られてしまう。

あまりの威力に上条の体が宙を舞い、そのまま地面へと落下した。

上条はすぐに態勢を立て直したが、敵はもう次の一手を繰り出そうとしていた。

彼女は速記原典ショートハンドの1ページを口で千切りとる。そしてそのページは気流が集まった球体と化す。

オリアナはそれを上条へと投げつける。

キュンツ　　との凄いい音とスピードを成したそれは上条の腹部にヒツトする。

あまり威力に上条の足は地面から離れてしまった。

だが敵の攻撃は終わらなかった。

オリアナは追いつちを掛ける如く、さらに上条の腹部へと拳を叩きつける。

ゴシヤツ

臓器が碎ける様な音と痛みが上条を襲った。

「グハツツ」

彼の口から血が垂れる。恐らく2回連続で腹部を攻撃されたせいだろう。

そしてそのまま上条はまた地面へと転げ落ちる。

彼は数回咳をした。腹からくる吐き気に耐えられなくなったからだ。

そんな呆気ない上条を見てオリアナは笑い飛ばした。



ボゴオンツツ ドガアンツ ズドオオオンツツ

複数の爆撃がオリアナだけではなく上条もろとも襲う。

だが彼等は急いでいる為か一発もヒットしなかったが……。

「あら。邪魔が入ったわね」

わずかだがオリアナの表情は険しくなる。

「おい！！テメエ等！！俺まで巻き込んでどうすんだよ！！！！」

上条は上空のイカトンボへと叫ぶ

「おい……なんか地上でツンツンヘッドが叫んでやがるぜっ」

ラムジェットがスラストに問う

「うん。ウニか……なにかしら親近感を感じるんだが……」

スラストが腕組をしながら首を稼げる。

「イカトンボに……ウニボクイか……」

ダージはフムフム、と頷いていた。

「なあ、おれ良い事考え突いたぜ。」

「良い案？ラムジェット。そりゃなんだ？」

ダージが問う

「あのウニボクイに任せてみりゃいいんじゃない？そしてウニボクイが勝ったらそれでよし。でも例えアイツが負けても敵は体力を消耗してると思っから俺達が相手をする」

ラムジェットがスラスラ説明するが

「いや。もしタイムリニットが間に合わなかったらどうするよ」

「ア……」

「バーカーめ。じゃあさつさと攻——」

瞬間、ドゴオン。と、彼等三人中心に爆発が起こった。

「……俺達結局ヤラレ役かよコンチクショ……」

そして彼等はア〜レ〜と言いながら地面へと落ちて言った。

その原因は——

「イケメン現る現る、現る現る！……」



イケメン、再び。であった。

「ッッグッハッッ」

イカトンボは地面へと墜落した……。

ハッハッハッハッとAスタースクリームは高笑いする、が突然彼の体は閃光によって破壊された。

「見つけたぞ……。」

Mスタースクリームだった。

夕焼けと夜空の光が彼の青いボディに反射し幻想的な光景を作り出した。

Aスタースクリームは再生すると、ムキーツといった表情になり

「まだいたんかい！この野郎！」

ここで、二つの戦闘が始まった。

(くっそ。この状況を打破するカギは――)

上条はオリアナへと殴りかかるがあっさりと避けられ反撃される。その繰り返しだった。

\*

ステイルは目を覚ました。

彼が顔を上げると視界の中に苦戦する上条の姿が写りこんだ。

そして彼はとつさに右手を突きだした

「その名は炎、その役は剣、権限せよ。我が身を喰らいて力と成せ  
ッ！」

彼の右手から炎の球体が出現した。

それは膨張し時間が経つにつれ大きさが増してゆく。

「魔女狩りの王！！」

瞬間、右手の炎が周りに広がり、彼の懐から数百、いや数千枚のル  
ーンのカードが飛び散る。

そして、炎の中から真紅に燃え盛る炎の中に、重油のような黒くドロドロした人間のカタチをしたモノが芯になっている化物が飛び出す。



上条は右手を振りかざし、化物の動きを一瞬だが止める。

上条はそうした後オルアナへと殴りかかった

「グッ」

オリアナは腕をクロスさせ上条の拳をガードした。

だが敵は一人では無い

「灰は灰に、塵は塵に、吸血殺しの紅十字！」

ステイルは両手に炎を装い、オリアナへと走るが

「なッ」

地面に落ちていた石に足を躓き転んでしまう

「がはッ」

「家に帰れ！ヘタレ魔術師！」

呆気なさすぎるステイルに上条は言い放った。それに対しステイルは

「黙れド素人！！」

そう言うと両手に装った炎を地面へ叩きつける。

ドゴオオオンツツと爆発が起こる。

その爆発はオリアナどころか上条まで襲う。

上条はオリアナを殴ろうとしていたが爆風のおかげで標準が誤ってしまった。

だが

その拳はオリアナのガードをすり抜け、腹部へとヒットしてしまう。

「があッッ」

オリアナは前もって上条の攻撃を予測してガードしていた。だが狂った拳のせいで見切れきれなかったのだ。

オリアナは口の中で鉄っぽい味をした液体を感じた。

そして彼女は上条を睨めつける。

「イノケンティウス！」

スタイルの指示の元、怪物はオリアナへと襲い掛かる。

オリアナはそれを避けきるが残りの二人が攻撃をしかけようとする。

スタイルは手に炎を、上条は拳でオリアナへ攻撃しようとする。と走ってくる。

「邪魔だ馬鹿！」

「君こそ退け！」

彼等はお互い邪魔し合いながらコチラへ突っ込んでくる。

そしてオリアナは思う

( どう言う事？これじゃ動きが読めないッ )

彼女はとりあえず速記原典の1ページをむしり取る。

そして氷の剣で攻撃するが、

パキンッ それは上条の幻想殺しであっさりと破壊される。

そして

「はああああッッ」

上条は頬に、ステイルは腹部へ拳を放った。

「グフッ」

ゴシヤッ その拳はそれぞれヒットし、彼女は吹き飛ばされる。

彼女の体が地面へ転げ落ちる。

( ……基準点 )

( 絶対の基準点が欲しい )

( 明確なルールを。皆が幸せになって誰も価値観の層を生み出す悲

劇に巻き込まれない様な、そんな最高の世界を……………)

(だから勝つのよ……………)

(勝って答えを見つけてみせる)

彼女は速記原典を見つめる。

「私は、私の名はB a s i s 1 0 4」

彼女は魔法名——殺し名を名乗り立ち上がる

それを一番先に悟ったのは同じ魔術師、ステイル＝マグヌスと言っ  
のは言うまでも無かった。

「伏せるド素人！」

ステイルは上条を蹴り飛ばす。

オリアナは速記原典の1ページをむしり空へ投げる。

それは光の球体となり、空へと向かった。

バキン とそれは弾け飛び、氷の破片が降り注ぐ。

それはステイルの腹に突き刺さりし、彼は倒れてしまう。

それと共に魔女狩りの王も消滅した

「ステイル!!」

上条はステイルへ駆け寄りうとしたが

「何処に行くの?」

上条は立ち止まる

「坊やの相手は私でしょ?」

上条は拳を握った。

「いい加減にしろよ……。何人傷つければ気が済むんだッ。」

オリアナはクスツと笑う。

「お姉さんだつて誰も傷つけないわ。でも私には目的があるの。さあ、来なさい。坊やを潰せばお姉さんほ役目は終わり」

「あとは クローチエディピエトロ 使徒十字 で、ローマ正教がお姉さんの望んでる世界を作ってくれる」

「何が目的だ……。他人任せで未来を決めてもらってる分際  
で豪そうな口利いてんじゃねえ。」

彼は奥歯を噛みしめながら言う。



「他人まかせ・・・かあ。そ、お姉さんはね、誰だって良いのよ。誰かがこの世界に転がる主義主張を束ねてさえくれればね」

「そしてお姉さんは、その基準点を絶対に守る」

「それがお前の目的か。俺は小難しい事なんか解らねえ」

「ただ、と上条はオリアナを見る。

「そんな目的の為に、学園都市の皆を差し出せなんて馬鹿な目的は受け入れられないッ。」

オリアナは瞳を閉じて言う。

「坊やは知らないからそんな口が利けるのよん。身に掛る光景に呆然と立ち尽くすしかないあの表情を見た事がから・・・。」

「ただ悔しいって一言聞いた事がないからッ」

彼女の言葉はさっきまでとは違い、怒りが強調させられていた。

「だとしても、それが学園都市を好きに攻撃して良いなんて理由にはならない。」

上条はオリアナと睨む。

「誰かの為に、別の誰かを踏み台にして良いなんて理由にはすり替えられない！」

「絶対にだ!!」

「ッ」

「お前が抱えてる問題なんて。皆感じてる事なんだよ!誰だって失敗するし、時には転ぶ!」

「けどな、転んだら起き上がればいい!どれだけ無様でも立ち上がるんだよ!」

「他人の人生を途中で投げ出すんじゃない!」

「お前はどちらを選ぶ。オリアナ!トムソン。一回失敗したからって全てを他人に任せるのか!例え失敗しても、その失敗した人に手を指しのべてみるのか!」

オリアナはしばらく黙って聞いていたがニヤツと薄く笑い、ため息をつく

そして、速記原典のページの全てを、まとめて引きちぎった。

「ッ」

「これで決着をつける。」

彼女はそう言うと速記原典を手前に投げる。そのページは周りには  
ら撒かれた――が

それは突然停止し、金色に発光する。全てのページが彼女の右腕を  
中心に球体として集まり巨大な炎の塊の様な物へと変化した

「我が身に宿る全ての才能に告げる　その全霊を解放し目の前の  
敵を討て!!」

彼女はそれを上条へと投げつける。

それは地面を削り取り、その破片を吸収しながら上条へと向かって  
くる。

「おおおおおおおおおおおッッ」

上条は右手でそれを殴る。

パキンッ　それは完全に打ち消された――　と思っただが、

吸収した地面の破片の塊が姿を現す。

オリアナはフツと薄く細く、笑う。

そして、上条がそれを打ち消した事により、吸い込まれた物は逆流  
し始める。

ズドオオオオオン、

破片は爆発の如く周りに飛び散った。

もちろん、その破片は上条へ直撃する。上条は何とか立ち上がるが、血が体を伝って地面へと落ちる。

ポタ、ポタ、と血をだしながら上条は激痛を感じた。

「あ、ハアッ」

視界がグラリ、と揺らいだ。

体が横に倒れようとしていた。

だがそうしている間にも、オリアナはこちらへと向かってくる。

(畜生ッ)

その時、上条の周りで傷ついた犠牲者の事を思い出す。

(・・・・・・・・)

(あれが、俺の覚悟の現れだ・・・・・・・・)

(それを、こんな所で台無しにして)

「溜まるかよ!!!」

上条は倒れる体を足で、支えた。

ズサアツと砂が舞う。

「なッ」

オリアナは驚く。まさか此処で立ちあがってくるとは思わなかったからだ。

「ぐ、グオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！」

上条とオリアナの拳が交差した。

オリアナの拳は上条に当たらず、そのまますり抜け、

上条の拳は――

ズゴオッッ

オリアナの頬に激痛が走った。

そのまま彼女はグルン、と数回回転した。やがて、彼女の体は地面へと陥った。



追跡封じ（ルートディスタープ）（後書き）

スタスク「幻想殺し」

上条 「？」

スタスク「男女平等パンチってすげーよ」

上条 「はあ?!」

スタスク「あのちっこいのと言い、さっきの女と言い、すげーなお前」

上条 「い、いや意味が」

スタスク「まあ、俺も『殺した事』くらいはあるんだがなあ」

上条 「……………」ガクガクブルブル

一方通行「つウーかよオ」

スタスク「って誰だお前！」

一方通行「俺はある事情で『10031』人殺した事あんだぜエ」

一方通行「それよりはマシだろ。おかげでコッチは人生丸ごと変わっちまったけどなア」

スタスク「・・・・・・・・マジ？」

一方通行「マジ」



使徒十字（クローチェディピエトロ）（前書き）

ステイル「なんで君たちはそんなにやられてばかりなんだい？」

ラムジェット「ソッ」

ステイル「本当は、僕たちより断然強い筈なのに」

ダージ「ゲッ」

ステイル「銀河最強のジェットファイターとは、良く言った物だね」

スラスト「ブッ」

ステイル「そんなだからイカトンボと呼ばれるんだ」

イカトンボ「」「チクショーツツ」「」

使徒十字（クローチェディピエトロ）

「う、うん？」

フレンジーとランブルは目を覚ました。

そして記憶をたどって、これまでの事を思い出した。

二人はゆっくり立ち上がる

「おい、大丈夫かよランブル？」

「まあ、なんとか大丈夫だぜ」

そして二人は周りを見渡す。

見てみると倒れてる敵、そして上条達が出た。

「……終わったのか？」

「どうやら、そうみてえだな。」

「ああ。」

「帰るか？」

「そうだな！」

二人はジャンプするとそのまま空を飛行し、仲間の元へと飛び立つ。

\*

「ステイル！」

上条はステイルへと駆け寄った。

ステイルはオリアナに攻撃され腹部から血が出ている。

その血は地面に張り付いたステイルの頬を赤く濡らした。

「僕は良い。それより使徒十字クローチエディビエトロを……。オリアナに場所を吐かせろ……………」

ステイルの声は掠れていた余程ダメージが酷いのだろう。

上条はステイルの言うとうりオリアナの元へ駆け寄ろうとするが

『心配する必要はないかと。もうすぐ全てが終わりますので』

突然、女性の声がする。

上条は周りを見渡すが、自分とステイルとオリアナ。それとあつちで延びているイカトンボだけだ

恐らく、何処かから通信魔術を使用し、通信で話しているのだろう。

「リドヴィア＝ロレンツエッティ……」

ステイルが呟いた。恐らく声の主の名前だろう。

『まもなく使徒十字その効果を発動し学園都市は我々、ローマ正教の元へ改変されます』

「俺達みたいな邪魔者は此処で排除するってんのか?!」

『我々は、そちらの傷をも慈しみ、直して見せると宣言しているだけ。もちろん、それがローマ正教にとって有益だと判断できればですけど』

「なんだと!」

上条は怒りを込めて言った。

「まともに取り合うな。上条当麻」

ステイルが言った。

上条はステイルを向く。

「リドヴィアはこの近くに居るはずだ。霊装もそこに――」

『誤解無き様告げておきますが使徒十字は現在『学園都市にはありません』ので』

上条達の思考が一瞬停止した。訳が解らなかった

「な、に？」

『使徒十字作り出されたローマ教皇量是最盛期には4700平方キロメートル。』

学園都市の外から離れたとしても、余裕で街の全域を確保できるかと。』

「やられたッ。オリアナはお取りか……………ッ」

『彼女が撃破されたのは残念ですが、それさえも使徒十字が都合の良い方向へと改変してくれるでしょう。』

「こちらにとって重要なのは、『科学が宗教に屈すると言う一点のみ』。科学を否定し、我々の力を示す事で主の権威は取り戻せるかと』

「探索に攻撃、今の土御門に二回も魔術を使うのは不可能だ」

ステイルが悪態をついた。

「くっそ！じゃあどうすりゃいいんだよ！」

『我々は、学園都市の破壊は行いません。科学と言う異教を捨てさせた後、貴方達を、愛すべき――』

ステイルはうつ伏せの状態から仰向けになる。

「土御門を呼べ。戦術円陣で、リドヴィアの居場所を割り出し、僕の通信術式を使って外の部隊とあのイカトンボ共に任せれば。」

『無駄ですので。使徒十字で世界が改変されるまで残り、』107秒』

『チェックメイトです』

リドヴィアは通信の向こうで笑いながら言った。

「クッ」

「なにか無いのか?!この状況をひっくり返す。最後の切り札が！」

「夜空を使用した星座の魔術……。夜空の光を地上で集めて……」

「。。」

上条は何かを思い出したかの様に携帯をいじる。

「土御門！学園都市の外にあつて、学園都市全体を巻き込む使徒十字の使用ポイントはいくつある?!」

『なんだつて?』

「黙つて答えろ！今の条件で、一番遠いポイントは何処だ！」

『……。学園都市外周北部1700メートル、つて所だにゃー。それがどうしたんだ?』

上条は通話を切り、さらに携帯でスケジュールを見た。

「後……20秒……」

上条は手を滑らせ、携帯を地面に落としてしまった。

上条は携帯を取ろうとするが

『もうおしまいです……』

「確かに、もうおしまいだな。結果がこのザマってんじゃ俺は確かにおしまいだよ。」

そして上条は恐れた

「・・・・・・・・」

スタイルは目を細める

「なあ、そう思うだろ。いくら『テメエの幻想をぶち殺した』つつつてもよ」

だが、それは学園都市の支配が恐ろしかった訳では無い。

「クラスメートの約束も守れない様じゃな」

『友達の約束が守れなかった事』にだった。

『はあ？何を——。！』

リドヴィアは学園都市の外からでも確認できた

それは光を散らしながら空へと舞い上がり、弾け飛んだ。それはきれいな色だった。

それは——花火。

そしてその花火は学園都市の夜空を覆うように打ち上げられる。

このままでは使徒十字が発動できないと彼女は悟る。

『な、なあ・・・・・・・・』

「現在時刻は午後六時三十分ジャスト。知らなかったか？ナイトパ



「リードが始まる時間が、この綱領があれば星空を十分塗りつぶせる。」

「お前が何処に居ようとな」

「如何する？俺はお前が使徒十字を壊してもう、学園都市にちよっかい出さないってんならそれで良いと思ってる」

『本気で言ってるのでッ？私はローマ正教徒の一人だとお忘れかと・・・』

「そうかい・・・だったら」

上条は大量に打ち上げられている花火を見つめる

「運動会らしく、おいかけてこでもするんだな」

\*

此処はジェットロン基地。

彼等は外の見通しが良い部屋いた。

窓を開けている為、彼等の未来的かつ、機械的な基地に外の静かな空気がただよる。

「うおおおお?! なんじゃこりゃあああ?!」

スカイワープが叫んだ。

いきなりの打ち上げ花火に驚いたのだろう。

「はっはっはっは。なに驚いてんだあ?!」

「ダセエぜ!」

フレンジーとランブルがスカイワープに言い放つ。

「うるせえい」

「ヒューズが吹っ飛びそうなくらい、綺麗だな……」

サンダークラッカーが眩く。

「まあ、悪くはねえや……」

スタースクリームも眩いた。

『これはナイトパレードと言って、この街全域で花火を打ち上げると言うイベントだ』

サウンドウェーブが説明する様に言った。

「まあ、ゆっくり楽しめって所かぁ……。じゃあ飲むか」

スタースクリームがエネルギーが入ったグラス（彼等に有った大きいサイズ）を見せびらかす様に持ち上げる。

「 temeエ等！久しぶりのエネルギーだぁ！今夜は楽しくなるぜえ！」

『「「「カンパ〜イ！」」」』

彼等はグビグビと飲み干す。

「あゝ、ウメエ〜かオイ」

スカイワープがフレンジーに問いかける

「ウメエ〜のなんのヒツクツ、」

どうやら酔っ払った様だ……。

「なんだよ。お前そんな濃いエネルギーに弱かったか？」

スタースクリームが呆れ気味に言う。

「ふう、まあ今回は良い仕事したからな」

サンダークラッカーが言った。

『・・・・・・・・』

サウンドウェーブは黙ったままエネルギーを飲んでいた。

「おい？なんか忘れてないか？」

スカイワープが言った。

スタースクリームとサンダークラッカーがしばらく考えるが

「「さあ？」」

(イカトンボとダロ……)

とサウンドウェーブが心の中で呟いた。

そして彼が見上げた空に、彼等の顔が映った気がした。

「「「キレーン」」」

とそんな事を想像してしまった。

『気持手悪イナ』

\*

九月二十日

此処は学園都市外、と言うより海の上だった。

そこに、スラスト、ラムジェット、ダージがいる。

そして、ステイル、がラムジェットの肩の上で立っていた・・・

ちなみにステイルは腹に包帯をグルグル巻いている。しかも黒い神父服の上からも包帯を巻いていた。

そして、ダージとスラストが海に潜ったり上がってきたりしている。

「まだ見つからないのかい？」

ステイルが不機嫌そうに言う。

どうやら彼等は何かを探しているらしい。

「うるせえな。なんならお前等が探すか？」

スラストが肩から下が海に入った状態で言った。

「いや、やめとくよ」

タバコに火をつけながら言った。

「たつく。お前14歳なのに、煙草を吸うんじゃないよ」

「余計な御世話だ」

そしてスラストが空へと飛び立つ。

どうやら空から探そうと言う魂胆らしい。

「ん？」

早速スラストが何かを見つけた様だ。

彼はそこへ向かう。

そこには、水中にぶかぶかと浮かんだ修道服を着た女性と、飛行機の乗組員の様な服を着た男性がいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼の目的は修道女の方だが・・・・・・・・

「まあ、ついでだついで」

スラストは女と男を巨大な腕でわし掴みにした

そしてラムジェットの所へ一気に移動する。

「おい、見つけたぜ！」

「よし、あとは使徒十字だけだ。」

スタイルが言った。

だがすぐに結果はでた

「\$%#&&'#%##"">#',」

海の中でダージが叫んだ

そして顔を出す

「おい！あのクローティデピエテヨロ見つけたぜ！ほら」

彼は腕を海からだす。彼の手にかそれがあった

「……………クローチエディピエトロだよ」

ステイルが呆れて言う。

そして、ダージが戦闘機へトランスフォームする。

戦闘機のコックピットが展開される。

そしてステイルはラムジェットの肩からコックピットに飛び降りる。

やがてコックピットは閉まる。

そしてラムジェット、スラストもトランスフォームし、全速力でイギリスへと向かった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5553q/>

---

とある機械の航空参謀（スタースクリーム） TF

2011年9月2日21時13分発行